

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



保育界の先駆者倉橋惣三

# 倉橋惣三選集 <全4巻>

くり返し読んでいただきたい本です

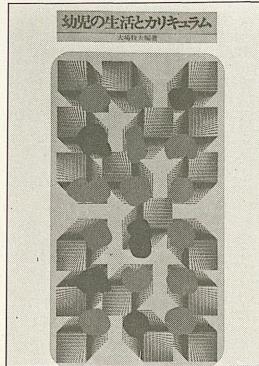


わが国幼児教育の基礎的な理論を集成し、熱心な指導と啓蒙によって、幼児教育界に多大な貢献をなした倉橋惣三先生の没後10年を記念して刊行された選集。名著として古くから愛読されてきた「幼稚園真諦」理想と反省を述べる自伝「子供讃歌」自らを園丁とした「幼稚園雑草」珠玉の随想「育ての心」「保育案」等々を収め、幼児教育を志す人々の必読書。

東山魁夷装丁。美装製本。

- |                      |                             |
|----------------------|-----------------------------|
| 第1巻 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル | .....B 6判 410頁 2,000円 〒140円 |
| 第2巻 幼稚園雑草            | .....B 6判 444頁 2,000円 〒140円 |
| 第3巻 育ての心・就学前の教育      | .....B 6判 454頁 2,000円 〒140円 |
| 第4巻 保育案              | .....B 6判 454頁 2,000円 〒140円 |

最新刊



## 幼児の生活と カリキュラム

大場牧夫著

B5判 188頁 1,600円

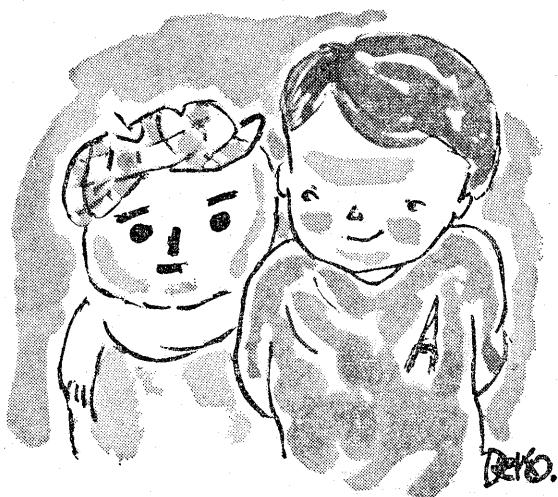
どうしたら適切なカリキュラム編成ができるか。幼児への生きた働きかけをするには、どんな準備が必要か。遊び、生活と仕事、課題活動を保育の基礎におく一幼稚園の実践を通じ集団における幼児の成長、発達をとらえる。

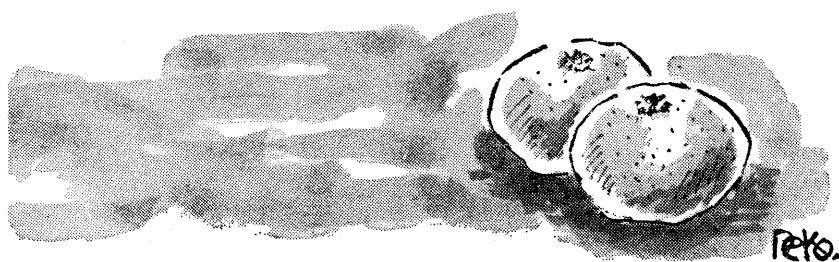
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03) 292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

# 幼児の教育

第七十四卷 第二号





## 幼児の教育 目 次

— 第七十四卷 二月号 —

表紙 三好碩也  
カット 中島英子

灰神楽	串田孫一 (4)
私の幼児教育論Ⅴ "保育の基本" (31)	神沢良輔 (6)
幼稚園誕生百年を迎えて思うこと	山村きよよ (10)
雪・泡・焼物	前野紀一 (17)
"幼児保育の芸術性" —倉橋惣三選集第四巻より—	
"幼児保育の芸術性" をめぐって	森田宗一 (21)
川崎千束	山道陵子

©1975  
日本幼稚園協会



- 幼児との出会い ..... 長山篤子 (30)  
「自由遊びの指導」をめぐって ..... 南館忠智 (35)  
洋書紹介 ..... 江波諄子 (42)  
出会い—その二— ..... 赤間峰子 (46)  
生命をかつぐつて重いなあ ..... 福井達雨 (48)  
旅・発達 (一) ..... 津守真 (53)  
橋詰良一著 .....  
「家なき幼稚園の主張」と実際 (八) ..... (59)

# 灰 神 樂



串 田 孫 一

瀬戸物の火鉢が何年か前まではとつてあったが、いよいよ

邪魔になつたので庭に出した。それを半分土に埋めて泥と水を入れ、慈姑を育ててみたりしていたが、何かの時に割れて、姿を消してしまつた。勿論、それは子供の頃の火鉢ではない。

冬仕度の時に、幾つかの客用の桐の火鉢などを押入れの奥から出して、灰篋の手伝いなどを面白がつてしまつたが、その大きな瀬戸物の火鉢は一年中出してあつた。夏のあいだの二、三ヶ月は、部屋の片隅に寄せられていたが、秋になると、それに入れる日が段々多くなり、いつの間にか、夜になると、手を繕うために坐布団をそのそば

へ引き寄せる。

リュウマチで手の指の関節がふくらんでいた年寄がいたが、その火鉢の番人のように坐つていて、時々煙管で煙草をのんでいた。私が火にあたりに坐ると、きまつて、あぶりましょ、かえしましょと言つた。冬毎に、全く同じ調子で繰り返されるその言葉を聞くのが次第に淋しくなり、辛くなつて来るのだった。

寒い風の吹く外から駆け込むようにして帰つて来て、赤くあくらんだ手をいきなり火鉢のへりに置くと、そこが飛び上るほど熱くなつてゐることがあつた。私は段々にそんなことにも用心をするようにはなつたが、つい忘れて手を置いては

失敗をした。

私は冬になると霜焼になつた。今はどういう関係か、霜焼でそれが崩れて綿帯を巻いているような子供を、少くも東京の都心では見掛けなくなつたが、小学校の頃までの友だちの手を想い出してみると、半分以上が冬は綿帯を巻き、それがよごれてぶらさがつてているものもあつた。

よく摩擦をすれば霜焼なんかにならないと言われたが、そんなことでは駄目だつた。熱い湯に生姜をおろして入れ、我慢してその中に手を入れさせられたり、痒く腫れているうちに、細い硝子の瓶に入つたレメドールという油っぽい薬をつけ、もつとひどくなると、黒いどうどろのインチオールをべつとりつけ、ネルの布切をあてて綿帯をかけた。

そうなると手袋がはめられなくなつて、また新しい箇所が赤く腫れ出し、冬のあいだはどつちみち手がさばさばすることもなかつた。

その火鉢の傍らに背をまるめて坐つていたおばあさんの指

先などに、歎あきが出来、手が全体にかさかさになつていて。その歎には、豆腐屋に売つてゐる黒い堅い膏薬をつけていたが、火箸を焼いてその膏薬をとかしながら、裂けた口にこすりつけていた。痛がりもせずに、時々口をとがらせて、ふつ

ふと吹いていたが、見ている方が顔をそむけてしまうのだった。

その火鉢には重い鉄瓶がかけてあつた。鉄の頑丈な五徳が埋つていて、灰ならしも大体灰に立ててあつた。だから火がおこり過ぎて灰をかけるような時には灰ならしも熱くなつてるので、それを持つ年寄の手つきは独特だつた。

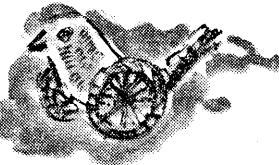
私はその火鉢のそばで蜜柑を食べた。とつたすじを火にくべたりするので、匂いが立ちのぼつた。年寄は蜜柑を食べる時には、袂から手拭を出し、それを畳みなおして膝の上にのせてから皮をむいていた。私はまたその火鉢の上で鉛筆を削つた。よく切れる切出しで削つた。その屑の燃える匂いはよくて、何となく意欲が湧いて来る感じであつた。

その年寄のところへ、極くたまにお客が来た。隣の部屋から襖越しに聞いてみるとお客様の声ばかりが聞こえていたが、ある時突然大騒動が起つた。行つてみると部屋中灰が飛び、障子をあけていた。

どうも灰神薬をあげてしまつてと言ひながら、お客様は幼い私にも恐縮して掃除をはじめていた。火鉢とともに灰神薬も見られなくなつた。

# 私の幼児教育論 V

## "保育の基本" (三)



神沢良輔

### 三 保育の基本 (三)

#### — 幼児とのかかわり合いの中で —

(v) ひとりひとりの幼児のことばの中にある感情を受容する

"先生、早くきて、このボール紙切れないもの"

"先生、キリンさんの絵かけたよ、これみてよ"

"先生、ブンブンとこがね虫って、いつしょだね"

"先生、ぼくらの組に入つてよ。リレー負けてばかりいるんだ

もん"

"先生、ごちそできたから、食べにきてちょうだい"

"先生、きのう、ぼく動物園へいったんやに"  
"先生、わたし、そと（室外へ）いつくるわ"

"先生、○○さん、どこにいるかしらない"

"先生、○○君と××君とけんかしとるに"

"先生、○○ちゃんが、わたしの鉛筆もつていつて返してくれ

へんに"

"先生、○○君たち、ぼくを遊びに入れてくれへんに"

幼児たちは、保育者に対し、いろいろな"ことば"による働きかけをする。ここにあげたのはその一例であるが、このような"ことば"の中には、幼児の保育者への手だけや参加、承認、判断、処置などの要求、意志や感情の伝達、報告などという、い

るいろいろなことがらを含んでいる。しかし、やはりもつともたいせつなことは、幼児は、それが必ず保育者に“受容”されるものだと思つてゐるということである。

つまり、幼児は保育者に対して、いろいろな“ことば”による働きかけをするが、その働きかけに対して、大人の間でするような、その“ことば”的もつ内容そのものに対する保育者が反応するということだけでは、幼児は満足しない場合がきわめて多いと、いうことであり、それは、幼児の“ことば”が、決して表現されたそのままのことではないということである。

もちろん、大人どうしの、“ことば”によるコミュニケーションの場合においてすら、その根底に、感情を中心としたコミュニケーションがあるということについては、いまさら言及するまでもないだろうし、また同様に、幼児の使う“ことば”と幼児の認知との関係についても、大人のそれとはきわめて大きな差異があるといふことがいえよう。

(2)

そこで、幼児の“ことば”による働きかけについて考えられることを、具体例についてみていくことにする。

たとえば“先生、早くきて、このボール紙切れないもの”とい

う、いちばんはじめに例示した“ことば”に対する、保育者はどのように受けとめ、反応したらよいのだろうか。そこで、まず、これについての見方の例を示してみると、

1 この“ことば”は、保育者に対して、切るのを手伝つてほしいという、要求のようにも思われるし、

2 どのようにして切つたらうまく切れるのかということについての、保育者の判断や処置を求めているようにも思われる。

3 また、ここまでがんばつて切つたんだぞということに対して、その努力を保育者に認めてほしいという、要求のようにも思われるし、

4 保育者に、自分のそばで、作業を見守つてほしいということを、ボール紙がうまく切れないということを理由にして、望んでいるようにも思われるのである。

もちろん、ここにあげた他にもいろいろのことが考えられるであろうし、当然そのようではなくてはならないだろう。また、ここにあげた四つの分析の中に適合しているものがあるとしても、そのうちの一つである場合もあるし、それ以上のことが混合している場合だつてあるだろう。

このようにみてくると、幼児の保育者への“ことば”による働きかけに対して、どのように反応したらよいか、保育者としては

本当に迷う場合が多いと思われる。しかし、保育者としては、で

きるかぎり正しく幼児の“ことば”的意味を分析して理解していくことは、決して悪いことではないし、必要な場合もあると思われる。

そのためには、はじめに記したような、いろいろの幼児の保育者への働きかけの“ことば”を、類型に分けてみていくという方法も考えられよう。また、これらの幼児の“ことば”の中には、なにか類型化していくことも可能のようにも思われるのである。だが、それは、幼児の“ことば”を、なんとなく表面的にみる結果ともなるようにも思われ、ここでは、私はあえて類型に分けることはしなかった。それよりも、もっと幼児の内面の世界で、幼児の“ことば”をうけとめることの方に意味があると思つたからである。

(3) 私などのような園長では、幼児からの“ことば”による働きかけに對して自信がもてず、どのように反応してあげたらよいのかについて戸惑うことが多かつた。そして結局は、“ボール紙が切れないのでね”など、というように、幼児のいった“ことば”を、もう一度幼児に返してしまって、その結果が多かつたし、返したあとでどのようにそれを幼児が受けとめてくれたか、おそるおそる幼児の目や感情の動きに求めて、それでよかったです。つたり、もっと別のいい方があつたのではないか、などと反省したりするということのくり返しの中で生活していたようである。

でも、実際に幼児を担任している保育者であれば、それが幼児にとって、どのような意味をもつてゐるかということについての判断や理解は、私などとは異なつてもつと正確にできると思われる。しかし、いつも幼児と接している保育者にとってみれば、このような幼児からの“ことば”による働きかけは、一日をとつてみるだけでも、その交渉の数や量は莫大なものになるであろう。

だから、ときには、幼児の“ことば”による働きかけを見落としたり、幼児の感情を無視して、保育者のその場その場の感情で安易に反応したりする場面がみられたりする。幼児が急に保育者

に對して反抗的になつたり、乱暴な行動をとつたりする場合には、よく前述のようなことが原因になっていることがある。保育中に職員室などにやつてくる幼児のなかには、ときどき“先生がきらいになつたん。先生、ちつともわたしのいうことを聞いてくれないんだもん”など、悲しそうな顔つきでいつてくる幼児もあるのである。このような幼児には、どのようにしてあげたらよいのか、やはり私などはただおろおろするばかりのときが多くつた。

(4)

もちろん、幼児は保育者に“ことば”によって働きかける前に、前回までみてきたように、まず保育者の目を見るだろうし、また、“ことば”によつて働きかけるときにもやはり必ずといつてもよいほど、保育者の目を見ながらするであろう。また、保育者との目と目が合わないかぎり、幼児はしゃべることをしない場合が多い。

つまり幼児は“ことば”による保育者との交流をする場合は、保育者の視線の中に含まれている感情を敏感にとらえて、それに対応した“ことば”を保育者に投げかけているといえる。

だから、幼児の“ことば”に對して、保育者がどのように反応

するかは、ひとりひとりの幼児にとって、いろいろな意味で、きわめて重大なことであり、幼児の発達そのものにも、大きなかかわりあいがあるということになる。

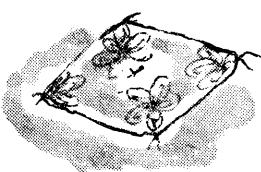
そのためには、なにはさておき、保育者は、まず、ひとりひとりの幼児の“ことば”による働きかけに對しては、その中に含まれている幼児の感情を、幼児の視線とともに、十分に受容してやることがたいせつである。というより、ひとりひとりの幼児は、いつでも保育者に、自分が“受容”されるというようになっているのである。また、受容されることによつて、安定し、自己を実現していくのである。

つまり、ひとりひとりの幼児が保育者と話し合いたがつてゐるのである。だから保育者はそのような幼児のひとりひとりに対し、常に、話したいという幼児の感情を受容してやる必要があるし、そのようなことのできるよう、保育の中で心がけることがたいせつである。

(曉学園短期大学)

# 幼稚園誕生百年を迎えて思うこと

山村 よ



## 五十三年前をふり返って

昔の女学校を卒業してすぐ、私は幼稚園の世界にとびこんだ。

故倉橋先生のご郷里で、先生の教えをうけられたあとを幼児教育一筋に子どもとともに組んでおられた静岡の桜花幼稚園、林敦子先生のもとで、夢中で三年間を過ごした私は、何も知らないままに青春時代を子どもと遊んだことが非常に印象深く、今でもあの藤棚一ぱいにさがったうす紫の藤色が、子どもたちの姿と一つになつて、はつきりと目に浮ぶ。(今でも私の大好きな色)

夢中になって遊んでいる中でも次々におこる毎日の生活の中で疑問は非常に多かった。しかし指図通りに、きちんと翌日の準

備をした。六色のむぎわらにぬるま湯を通してきれいにあきとり、一寸ずつに物さしではかって切り、めいめいの箱に何本かずつにわけたり、子どもの作品をきれいに仕上げたり、明日の準備と今日の整理、お掃除などに追われていた毎日の生活は、あちこちに見られる今の幼稚園の多忙な生活とあまり変わりなかつたが、毎日は楽しくて楽しくて……時々、これでいいのかしら? と思いつながらも、先輩にききただすことばもわからず、まごまごしていると林先生が簡単に解決してください、安心して皆さんと雑談にふけつていいたあのころがなつかしい。話し合いの中味は必ず子どものこと、保護者とのやりとり、はては恋愛論までとび出でて帰宅時間はいつも夕方、ときには帰宅がおそいと父親にせい

ぶん叱られた時もあった。こんなことは、ほんとうに今も昔も少しも変わっていない幼稚園風景だ。

しかし常に私の頭の中にこびりついていた事は「私は子守じゃない」「子どもたちは小さいけれどやればひとりでできることがいっぱいある」「これでいいのか?……もうと勉強したい」など、こうした気持ちを林先生を通して故宇式かん先生に話し、許可をいただいて静岡県からの推せんをうけて入学したのがお茶の水女子高等師範学校保育実習科だった。

その前年九月の大震災で全焼した校舎は、バラック建でそまつな所、今でも暗い中廊下が思い出される。でも毎日の学生生活のたのしさ、のびやかな十八名の学生の年齢はまちまち……私は三番目の年長者だった。

入学当時は倉橋先生の偉大さなどは全然わからず、ただ林先生からうかがっていた「すばらしい先生」のイメージはびつたりで、お話をおもしろく授業をうける午前中はほんとうに希望にあふれていた。どんなことを教えていただくのか? 期待は大きかつたが、やっぱり私の記憶の中には当時の先生は三、四人しか残っていない。それが、机の上だけの勉強はほとんど忘れ、生物の時間のようにいつも外に出ての勉強で、一学期に一、二回のお講義の他は井の頭公園に四季の観察、秋などは二回も虫の音

をさきに行つた。江の島、日光、三浦岬などで生きた勉強がとても楽しかった。

倉橋先生のお話はおもしろくて……一時間ばかりは「あつ!」と思う間に過ぎてしまう。ノートはいつも白紙、今になつて思えば、先生の著書『幼稚園雑草』に目次となつて書かれていることがみんな私たちの講義の内容だったかもしれない。とにかく「雨の日」「一人の尊嚴<sup>そげん</sup>」などは今だに私の頭にはつきり残つてゐる。あの黒い背広姿のハンサムなお姿は五十年たつてもまだ私の頭の中にやきついている。

そしてこのことは今、私が常に学生に話していることばを生み出している。

○ひとりひとりを大切に、一日一日を悔いのないように。

○子どもが自発性を起こさないのは、「先生」がおおいからさつてしまふからだ。

○「自己充実」「子どもと共に」「子どものうしろにさがつて」「生きのよい生活ぶりをのぞかせなさい、まねさせなさい」……「生活を、生活で、生活へ」など……

そうした授業を終つて、おおいそぎで幼稚園に帰り夢中で子どもたちと遊んだ。

最も印象に残っていることは和服姿の私たちが一組に三人、たすきがけで子どもたちのお弁当を食べたあと片づけをすることだった。たまに授業がおくれて帰ると、新庄先生がたすきがけでお掃除をしておられるのでびっくり、腰をかがめてまじめに「あやまり」すぐほうきを取りあげてお掃除にかかる……こんな姿は今的学生には望めない……ナンセンスなことだらうか？

あのころからもう五十年以上もたつて、今年で日本の幼稚園も百年目の誕生を迎えるという時、今、その半世紀を幼稚園の中で過ごしてきた私にはいろいろなことが走馬燈のようにめぐり始めている。長いようで短かつた半世紀を、ほんとうに幼児と共に過ごすことを生きがいとして、夢中で過ごした戦前の幼稚園生活がなつかしい。

その生活も公私共々大きな大きな波にもまれて、一時期は長野県の山の中に逃げた私も、農村での人間味あふれる素朴な生活と「変りない子どもの姿」にはげまされて再出発をしたおかげで今まで幼児教育ととりくむことができたのだ……と感無量のものがある。

### 倉橋先生と私、誘導保育

一年しかご指導をうけなかつた私も、当時はお講義が楽しいだ

けで、その理論がお茶の水幼稚園のどこに生かされているのか？全く考えもしなかつた。先生のお世話で当時幕張に開園された千葉県女子師範学校附属農村幼稚園の保母になつてから、私は思う存分、誰に遠慮もなく保育に専念した。今は亡き土屋まさこさん（日の出幼稚園主事）と二人で夢中になつて子どもたちと遊んだ。しかも午前中はお互いに二年生を担任し、お昼食もそそそこ農村の子どもたちを迎えて午後三時まで庭で、山で、電車ごっこやままと遊びに興じた。

農村幼稚園を二ヵ年で終わり附属幼稚園の本園に帰つてからがまた、楽しい園生活で八年間を一年保育児だけ専門に相手をつとめた。その間一ヵ月に二、三回は倉橋先生のもとに馳せ参じてじかにいろいろと助言をいただいた。誘導保育についても先生の理論を実際の現場にうつして実践し、いろいろな記録もとつたのに……何一つ残つていらないとは？

一身上の都合で昭和十一年に東京に出向を命ぜられた私は、麹町区の富士見幼稚園でもっぱら誘導保育の実践を試みた。ちょうど十三年秋に全国的に大きな研究発表をなさつた富士見小学校の附属幼稚園ということで（小学校は生活カリキュラムの実践発表）私も発表の仲間に入つた。記念講演は倉橋先生、私はおこがましくも倉橋先生の前で誘導保育案のテーマについて発表した時

のことがまあまあと思は出される。

倉橋先生の保育理念が、いつも「子どもの生活から生れたもの」ということで、折から靖國神社のお祭をテーマに実際保育を公開したことにつづき、時々子どもの発想から生れたあそびで、興味を誘導しながら一ヶ月に二つ位の「あそびのまとまり」を考えて誘導し発展させて行った。あのころが私にとって最も生きがいのある時代でこれは五、六年続いた。

そのころはお茶の水幼稚園でも誘導保育が盛んに行われた時代で、菊池先生、徳久先生などが大きな汽車などを庭につくって子どもたちと遊んでいる写真は、当時の幼児教育雑誌を賑わしていった。

### 「自由保育」ということば

倉橋先生の講演の中では「自由保育」ということばは出てこなかつた。いつごろから使われ出したかはつきりした記憶はないが……倉橋先生のお話をうかがっていた人たちは「子どもの自由な活動を尊重しなければ正しい保育者ではない」、子どもの自由なあそびをたちきつてこまぎれにしてはいけない。先生の計画はなければいけないけれど、そのために子どもの生活を「こまぎれにしてはならない」ということが徹底したのか、また一方ではお茶

の水の幼稚園は自由な保育形態をとっているから「まねしなくては……」などなど、正しい幼児教育の姿勢をもととする人たちがだんだんと「自由保育」ということばを口にし、自分たちの「保育形態を反省し出したころ」、毎年開かれるお茶の水の講習会で「一日の生活の流れ」と題された倉橋先生のお話が二、三回づいたことがあったので、私たちお茶の水の卒業生はもっぱら「自由な子どもの活動をおさえぬよう」と心がけた。そのためにずいぶん異端視された私たちの中には倉橋先生のお話をきいて育った卒業生だのに、「自由保育はできない、放任に流れてしまう」といつてそっぽをむいていた人たちも何人かいた。

このころには倉橋先生の「わる口」をいう人もでてきて（ロマンチスト、八方美人など）私などくやしくてくやしくて……そして一齊保育でかたまつてしまつた先生方と、どこまでも倉橋先生の保育理念を通そうとする人たちが対立した時もあったようだ。とくに国民学校になつた昭和十四年～十八年ごろまでは倉橋先生も自論をそのままお出しになれないでずいぶんお困りになつていたようにうかがえた。（これは私だけの見方かも知れないが……）

## 戦後の混とんとした時代

二十五、六年ごろには雨後のたけのこのように毎月十一十五園位が誕生し（東京の私立幼稚園）中には幼児教育には何のゆかりももない「おじさんおばさん」を園長先生とよばねばならない時代があった。無資格の先生方も多く、子どもを自由にあそばせるなどとは考えようともしなかつた。また、あそばせることよりも何かを教えて教育している姿が見えないと、園長先生も保母さんも「安心できない」という時代には、こま切れ的に保育項目をならべて一斉保育をする方が「らくだ」ということでだんだんと一斉保育に固定し、日課的作業がつづけられたりして型にはまつた幼稚園風景があちこちに見受けられた。

こうしたことに反発した私などは、当時文京区立第一幼稚園長として勤務していたので、もっぱら「自由保育」「自由保育はわが園から」などと看板をかかげて、子どもたちと楽しく遊んでいたものだ。

当時復活した東京市の保育会のお世話役をいただいた私は、いろいろな研究場面を見せていただいたら、研究熱心な先生方と夢中になつて「自由保育とは」「自由保育と放任」などのテーマをかかげて現場の先生方と討論会をもつたりしたが……それからし

ばらくは「自由保育は新しいよい保育のあり方で一斉保育はわるい保育？」というような極端なことをいう人たちも出てきて、私なども自己満足におちいったりしていた時代が相当ながくつづいた。

今、静かに考えて見れば、こうした保育形態は二の次のことで、大切なことは「正しい保育理念をもつ」ことを忘れていた人たちが多かつたのではないだろうか？

## 公立幼稚園と教育要領の通達

私立幼稚園が雨後のたけのこのように増加すると同時に、文部省の振興五ヵ年計画は各地に公立幼稚園をつくった。そしてたくさんの兼任園長先生が誕生した。幼稚園教育発展ということでは大変喜ばしいことで、私など有頂天になつて喜んだが、小学校教育をものさしにした兼任園長先生の中には、幼稚園教育を小学校の小型のものに固定させたり、中には全部主任さんまかせで、幼稚教育の理念を理解しようとせず、わからぬままに各市町村の教育委員会指導部にその指導を依頼するところもたくさんでてきた。

こんな時に、文部省では「幼稚園教育要領」を通達して一斉に幼稚園教育に光を与えてくださったのに、それを「受けとめる保

育者は？」それぞれの立場で、自分勝手にうけとめて、六領域を八

教科と同じように考えたり、幼稚園も「学校だ」とか？ いわれ

る方々もあって、脚光をあびたように喜んでいた私も、倉橋先生の保育理念とはちがった方向に流され、そうになつて、ずいぶん考えさせられた。

教育要領の中味が、保育を教育に、その方法を学習、指導といふことばにおきかえたために、そのことばに左右されて、今までのゆるやかな子どもの生活を「集団」にまとめ集団指導の研究をしてようとする傾向になつてしまい、公立幼稚園の研究活動は「指導計画」「ねらい」「導入」「評価」など、固苦しい考え方ひきずられてゆき、保育形態まで変わつていったよう思う。

その後各都道府県市町村では「先導的試行」の先どりをしようとしてか？ 「幼小一貫性あるカリキュラムの作成」とか「幼小関連授業」など公開されるようになった現在を喜んでいいのか？ 気になることばかり……幼稚園百年を迎えた今、幼稚園の姿はどんなふうに変わってゆくだろう？

子どもの自発性はおさえられ、自己充実など思いもよらない

「惰性にかかる日課的生活」で毎日が終つてしまう。

ほんとうに幼稚園は「誰のためにあるのか」問いただしたくな

る昨今である。

まま子扱いは受けていたが、昔の幼稚園にはこんな心配はおきなかつた。

特権階級の子どもしか幼稚園には行けない……ということを悲しんでいた時代から、ようやく大正十五年に幼稚園令が出てよろこび合い、だんだんと小学校教育と肩をならべるようないろいろな制度も考えられた。

戦後は、幼稚園教育は誰もがうけさせねばならぬことと自覚をもつ親たちが多くなってきて、世の中の人たちみんなから注目の一となり、学者の先生方も揃つて幼児教育とり組んでくださつた。そして、二十年前に故人となられた倉橋先生の保育理念がようやくまとまに考えられて、いろいろと思い出される時、子どもたちの幼稚園生活は、それぞれの人たちのもつ保育理念のあまさからこんなにゆれ動いてしまつたことを悲しく思う。

### マスコミと幼稚園教育

情報化時代、マスコミの力は幼稚園教育をゆがめている。

毎年春秋にはきまつてテレビで報ぜられる「幼稚園選びのための母親の啓蒙？」とくにNHKの番組には母親たちが目を見はつ

て見入る。忘れもしない今から五、六年前ごろから「七十年代わ  
れらの世界」にまで幼児教育が取りあげられてうれしいことでは  
あつたが……結果的には大変なマイナスだった。

それをうけてか？ その後の週刊誌、婦人雑誌には幼稚園のこ  
とが取りあげられ、「幼稚園の先生にはまかせておけない」「二歳  
ではおそすぎる」など、など、数多くの記事は、母親たちの関心  
のまととなり、「子どもに早く何かを教えこんだ方がよい」という  
結論を与えたものが大部分で、とくにN.H.K.から流された諸外国  
にみる幼児教育の姿などは、私たちには大変参考となる面もあつ  
たが、母親たちには何を感じさせたであろう。学者の中にもこう

したことに関心をもたせ、「幼児教育は日玉商品化して」商人ま  
でが「知恵のつくおもちゃ」に手をのばして大変なブームをよん  
でいる現状を見て、幼児教育者の中にはなげいている者が多いと  
思う。

短大の養成機関で学び、どんなに「正しい幼児教育理念」を学  
んで卒業しても、新任教員のつらさは、目先きのことがどんなに  
上手にできるか？ ということで評価され、四十人の子どもをど  
うまとめて教えるか？ ということが園長先生の目にとまるよう  
に、だんだんと自分のもつ保育理念とははずれたことをしなければ  
ならない。こんな「新任一ヵ年間の生活」が気になつて幼稚園か

ら逃げてゆく卒業生のなんと多いことか？

最近とくに甚しい現象は、卒業生の約半数、それも積極性のある優秀な学生が公立の保育所、保育所へと行ってしまう。私立保育所にも、幼稚園にも、「幼児教育にとりくもう」と自覚して奉職する人がだんだんと少なくなつてゆくのをどうしておさえることができるだろうか？

今こそ、マスコミに対し立ち向かう勇気をもてるよう勉強  
してほしいものである。

まじめに幼児教育にとり組んでいる新卒者を大事に育ててほ  
しいと思う。

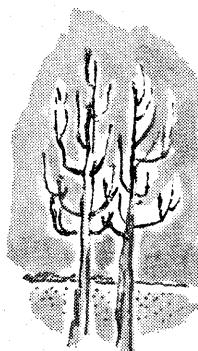
そして保護者の啓蒙を。

あちこちにつながる幼稚園教育の悪条件をのりこえて、幼稚園  
教育百年目を立派に迎えたいと思う。

戦後、世の中の進歩はすばらしい。そして日本を経済大国にま  
でおしつぶたと喜んでいた時に公害に驚き始めた。今、幼稚園の  
内外に、公害がおおいからこないように、私たち幼稚園関  
係者が手をつけないで守りつけたいものである。

(聖徳学園短期大学)

# 雪・泡・焼物



前野紀一

雪・泡・焼物——不思議なとりあわせと思われるかもしだせませんが、私にとっては、それほど空飛な連想ではありません。そのわけをこれからお話ししましょう。

\*

「雪はどうして六角なの」と聞かれて、「それは、氷の結晶の分子が六角に並んでいるからさ」と答えました。この答えに誤りはないのですが完全ではありません。それは、同じ氷でも、水が凍つてできた氷は雪のように六角の結晶にはならないからです。

雪は水が凍つてできた氷ではなく、水蒸気が空中で氷に変化したもののです。空中でなくにかの表面で氷に変わったものには、霜という別の名前があります。雪や霜のように気体が直接固体に変化する現象は昇華と呼ばれていますが、実はこの昇華こそ、氷

の結晶構造に内在する六方対称という個性が外に現われ、六角の雪ができる原因です。水蒸気は分子が空間を勝手に飛びまわっている状態ですから、一個の雪の結晶ができるためには無数の分子があちらからもこちらからも集まってこなければなりません。分子一個一個のこの旅路は実は大変な苦難の道です。仲間との競争はもちろんのこと、意地悪な空気の分子には何回も衝突されます。雪の結晶ができ上る昇華の過程は、まさに分子同士の骨肉の争いといつてよいでしょう。ところが、その結果、氷の個性は美しい六角の雪として表に現われてくるのです。

一方、水が凍つて氷になる時、分子にはこんな茨の道はありません。なぜなら、水の分子は初めから器に集められているのですから。しかも、将来の形まで決っています。丸い器なら丸い氷

に、四角の器なら四角の氷になるだけです。水から凍つた氷は、いわば過保護に育てられた氷です。人間に限らず、ミクロの分子の世界でも、個性ある結晶は厳しい試練の中でしか生まれてこないようです。

冬空から舞いおりる雪の結晶は六角ばかりではなく、各々千差万別です。雪は大きっぽく分けますと、細長い針と六角柱、平べったい六花（六本の主枝がある）と六角板、それに無定形の五種類に分類できます。このように種々の形の雪が存在することは最近は多くの人が知っていて、子どもでも雪といえば樹枝状六花や星状六花を難なく描いてみせるほどです。しかも美しい色までつけて。しかし、この美しい雪の結晶を本当に自分の目で確かめたことのある人は一体何人いるでしょうか。テレビや安易な本で与えられた知識と、本物から自分の体で感じとった知識とは、その深さと可能性において大変な違いがあると思います。

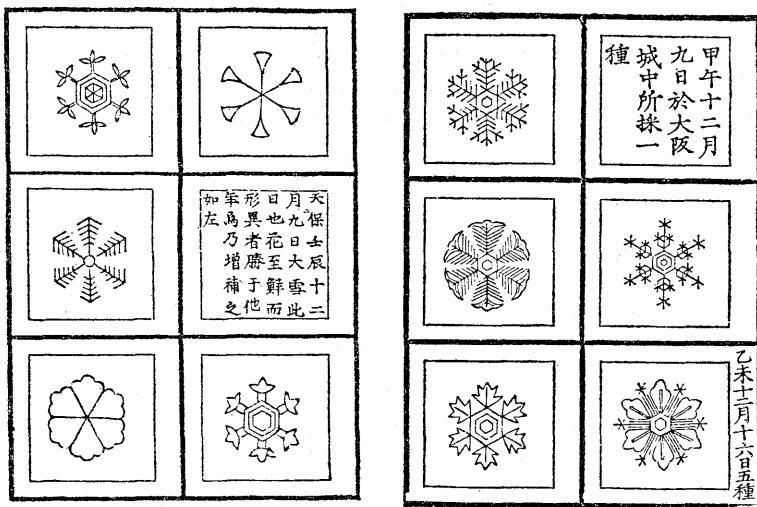
私たちの国は世界有数の雪国です。おそらく沖縄県を除けば、日本には雪が一度も降つたことのない所はないでしょう。交通の発達した現代、雪を見る機会を持たない人はいないといえます。雪の形を自分の目で確かめたことのない人は、ジェット機か新幹線のように駆けめぐらす歩調をほんのしばらくの間休めて、オーバーに降りかかる雪を自分の目でじっくり見てみてく

ださい。「雪の結晶の形は肉眼でも見えるんですか」と聞かれることがしばしばあります。人間の目はどんな高価な光学器械よりも優秀のようです。これには心がありますから、見たいものが最もよく見えるようすべてが自動的に調節されます。これは、舞台の上にいくら大勢の子どもがいても、親には自分の子が一番目立つて見えるのと似ています。雪の結晶も、見ようとする、目さえ向ければ、すいぶん細かいところまで見えてきます。見ようとする目、これが科学の目です。

土井利位どい としろうという古河藩の殿様が古河と京都と大阪で雪の結晶を観察し、「正・続雪華図説」という、わが国で最初の雪の本を出版したのは、今から約一四〇年前の江戸天保年間です。この二冊の本には一九五枚の雪華図が載っていますが、これらは、当時西欧から伝わってきた、それもおそらく現代の子どもたちが持つているものよりもはるかに幼稚な顕微鏡で観察し、丹念に筆でスケッチしたものでした。そのうちの一部を次に示しました。どの図を見ても、ちゃんとまげ姿の利位侯がいかに雪の結晶の中の自然の美に熱中していたかがうかがわれると思います。

\* \*

毎日の生活に使う氷は液体の氷が凍つてできた氷です。こうしてできた氷は過保護の氷で個性がないと先ほど書きましたが、こ



泡の入った氷はきらわれることが多いようですが、私はこの泡に魅了されて、三年ほど氷に泡を入れる実験に夢中になつたことがあります。今夜はひとつ、オンザロックの氷の泡を先ほどの見ようとする科学の目を使って見てみてください。そこには、シャボン玉のように丸い泡やラグビーボールのようにひょろ長い泡が、またパルテノン神殿のように細長い何本もの泡の列や、真珠の首飾りのような泡の列が、ピカピカ光つて並んでいるはずであります。このような種々の形の泡ができるメカニズム——それが私の心を魅惑したのです。実験を繰返した結果、泡の形は空気が供給される速さと氷が進む速度のかねあいで決まることがわかつたの

のような氷にもよくみると種々の顔があります。透明な氷と不透明な氷はその一例です。氷自身は無色透明ですが、雪や霜のように非常に小さくしかも表面に細かな凹凸があると光が乱反射して白くみえます。しかし、冷蔵庫で作った氷が白くて不透明なのは、中に空気の泡ができたためです。泡が氷の中にどうして入りこんだかといいますと、氷が凍る時、氷の中に溶けていた空気が氷から追い出されはしたもの、氷の成長が早過ぎるために再び氷の中につかまつてしまつたのです。その証拠に、たとえば水を煮沸して溶存空気を追い出したり、水をゆっくり凍らせたりしますと、透明な氷ができます。

ですが、実は、これがオリンピックのための氷作りにヒントを与えることになりました。

昭和四十七年二月札幌が開かれた第十一回冬季オリンピックの時、私の所属する北大低温科学研究所はスケートに最も適した氷を作るにはどうしたらよいか、という相談を組織委員会から受けました。詳しい経緯は省きますが、これに対する私たちの回答は、きれいな氷ができるだけゆっくり凍らせればよい、というひどく簡単なものでした。スピードスケートには、氷がよく滑りかつ表面は適度に柔らかくなければならぬのですが、そのためには氷の中に不純物や空気の泡が含まれていないことが必要条件であつたわけです。このような氷を広い競技場全体に作るのは技術的にも経済的にも大変ですから、札幌オリンピックの会場は表面数センチだけをこのようないすに仕上げました。といつても、イオノ交換樹脂を通して作った純水を二、三ミリずつ広い競技場に散水し、泡の入らないように時間をかけて凍らせるのは大変な根気を必要とする仕事です。こうしてとにかく泡の入っていない純水はできあがりました。しかし、オリンピック競技中この氷がその真価を示すためにはもう一つ、氷の温度の精密なコントロールという難問題が横たわっていたのです。

\* \* \*

粘土を整形して高温で焼き固めたものが、陶器、磁器などの焼物です。最近私は氷の焼物の物性を調べています。氷の焼物は南極の氷のことです。南極では夏でもプラスの温度になることはほとんどありませんから、降った雪は積る一方で、永い年月の後、押し固められて透明な氷になります。実は、このプロセスが焼物のそれと同じなのです。粘土は約千三百度でようやく柔らかくなりますが、氷は零度で融けてしまいます。南極は、人間にとつては確かに厳寒の地ですが、雪や氷にとつては灼熱の窯といえましよう。

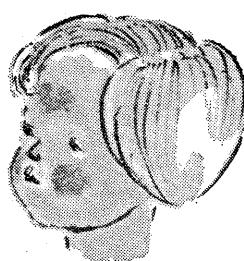
このようにして蓄積した一個の巨大な氷塊が、日本の四〇倍もある南極大陸を現在すっぽりと覆っているのです。先年米国南極観測隊はその上で深さ二一六四メートルのボーリングに成功しました。私が今調べているのは、その時回収された氷です。深い所の氷は約五万年前、つまり地球上にわが現代人（ホモサピエンス）が初めて姿を現わした時代の氷と推定されます。第四氷期のそんな時に降った雪を原料として、自然という陶工が南極という窯の中で五万年もかかって焼き上げた作品を前にし、私は今いささか興奮気味ですが、この奥深い窯変の意味を完全に読み終わるには今しばらくの時間がかかりそうです。

## 幼児保育の芸術性

倉橋惣三選集 第四巻より

あなたのどこが眞に幼児保育者なのか。何があなたを眞に幼児保育者とならせるのであらうか。つまりは、幼児保育者の幼児保育者たる真諦は何なのであらうか。こうした問い合わせていろいろの答えがあるのであらうし、さまざまに答えられるのであらう。その答えの一つとして、あなたは幼児の心を知る人でなければならぬ。また、あなたは幼児の生活を保護する人でなければならぬ。更にまた、あなたは幼児の生活を導く人でなければならぬ。いずれも、幼児保育者として、欠くことの出来ない研究であり、仕事であり、教育である。その必要と重要とは、あらためていうまでもない。そのひとつひとつが、それぞれ大切なことであり、それぞれとして貴重なことである。しかし、これらのそれぞれが

幼児保育でないのはもとより、これを合わせただけでも幼児保育になるものではない。これらの一つを欠いても、幼児保育は完<sup>まつと</sup>成<sup>せい</sup>されないが、これらが揃っているからとて、それで幼児保育が完<sup>まつた</sup>成<sup>せい</sup>ものではない。——というのは、これより以外にお必要なものが<sup>ある</sup>というのではなく、これらを包括し、これらを積載<sup>きざい</sup>し、これらを糾合<sup>きゅうごう</sup>する、もっと大きく、広く、深いものがありはないのかという問題である。わたしは、それを、幼児保育の学問性、社会性、教育性に対して、幼児保育の芸術性という言葉であらわそうとする。ただし、芸術性という言葉は、必ずしも簡明な言葉ではない。その各々の面にそうで、ちがつた意味を持たせられる。芸術の本質である美ということにしてさえも、極めて浅



いところ、甚だ浮いたところで解せられたりすることがある。すなわち芸術的とは、随分あいまいに使われたり、偏して用いられたりする言葉であるが、わたしがここでこの言葉によるのは、その渾然たる非分離性、全的な融合性に基づいてである。——またしても窮屈な言い方になったが、理屈や必然や目的を超えたうつとりした境地としての意味においてである。うつとりといって、理屈や必要や目的を捨てているのではない。あるいは必ずしも忘れているのでもない。それらをすべて包括し、積載し、統合していくながら、それらに分離しない前の、また、それらを一つに融合している境地という意味である。芸術にも、音楽にも、学問性も社会性も教育性もあるのであるが、美術・音楽それ自身の本質は、それらそれぞれの寄りあいでも寄せ集めでもない。一個の芸術である。すなわち、その本質は芸術性である。こうした意味いで、幼児保育も芸術性をもつものであり、芸術性をもつのでなければならぬと、そういうおうとしているのである。

児童心理学は、幼児の心を理解させてくれる。今日において、児童心理学の研究なしには幼児の心は理解出来ないといつてい位である。がしかし、理解だけでひとりひとり幼児の心に触れられるものだろうか。それは、どうしても芸術性（前にいった意味

で）のものでなければ出来ない。児童心理学で、幼児と共に泣けるか、一つ心に喜べるか、また、社会現実の逼迫感が幼児保護の急務に赴かせるのも常である。その現実に対する直視と憂慮から、周到と懇切の感謝すべき多くの社会保護が生まれる。がしかし、その事業的周到だけでひとりひとりの幼児の心を幸福にし得るものであろうか。これまた、どうしても芸術性のものでなければ出来ない。というよりも、保護が幼児の心を幸福にしているのは、いつでも、単なる保護のみでない芸術性によっていることなのである。それは愛ということであるといつてもいい。

愛こそ最も高貴な（恐らく最も美な）人間芸術なのである。更にまた、教育的理想は、幼児指導の目的を発せしめ方法を工夫させる。保護と相俟つて必須なのは言を俟たない。がしかし、目的と方法だけでは、一人の幼児をも抱くことも出来ないし、幼児を親しませることも出来まい。これまた、どうしても芸術性のものでなければ出来ない。というよりも、目的と方法とによる指導を真に教育ならしめ得たものは、その芸術性に他ならぬのである。こう考えて来て、あらゆる場合、幼児教育を真に幼児保育ならしめる本質とは、その芸術性であるといえる。

幼児の研究は大いに進歩した。幼児保護の必要は日々われわれ

を驅り立てる。幼児教育の重要なは愈々明確を加える。これによつて、幼児保育は、學問的に、社會的に教育理念的にまた教育技術的に発達する。幼児の福祉上教育上まことによろこびべきである。この発達は一日も忽せにしてはならぬ。このよろこびは、益益、拡大されなければならぬ。がしかし、これだけで、幼児保育の芸術性が充実されているとは簡単に考えられない。もし危惧の目を以てすれば、幼児保育の學問性、社會性、教育性が強調され、急に前へ押し出されることによって、その芸術性が微弱化され、時に後ろへ置き去りにされることはなかろうか。根がうつとりを特質とする芸術性である。うつとりはうつかりにまぎらわしき、うつかりをうつとりと取りちがえないとも限らない。——が、——それでは決して眞の幼児保育があり得ない。

幼児保育の芸術性を、はつきりと定義することはむつかしい。

名画の美を言葉で説明しつくせないと同一である。しかし、それを的確に見ることは出来るし、把握する（芸術的に）ことも出来る。たとえば、コメニウスや、パセドウや、フレーベルの著作や生涯に、それを感得することは誰にでも出来る。丁度名画や優れた音楽の中に感得し得る如く、その芸術性にうつとりさせられた言葉の中に感得し得る如く、その芸術性にうつとりさせられた言葉でいえば醉わせられるところがある。それは古典的

なことに他ならぬといわれるかもしない。あるいはそうかもしない。現代の學問も、社會事業も、教育も、理論と必要と方法とが先へ先へと進むことによつて、その本質としての芸術性が、追いつき兼ねているときがある。忙しいものの免れ難いところであるかもしない。しかし、その現代にあっても、眞の保育実際の中には、それらの諸性を超えて、うつとりとした境地に酔うものも少なくないし、酔う時もしばしばある。如何に芸術性の少ない、あわただしく、またかわきった今日のわれわれであるとしても、幼児の方は、変わりなくいつも芸術性そのものだから、それが化せられずにいないのである。心理学を考えながら近づいていっても、幼児は超心理学で飛びついて来る。事業施設として集めても、幼児は被保護者としてではなく我がままもいえ、いたずらもある。あまたたれて来るに至つては全て芸術的であり、それにつれられて溶けてゆく瞬間は全く芸術的である。教育で教育を考えている人でも、遊びの中に誘い込まれてうつとり遊んでいる姿には、芸術的なという言葉以外の言葉では形容出来ない姿が出る。それはしばしば若い先生の姿であり、老熟（老巧ではない）の先生の姿であり、それに見とれているわれらの姿もある。なんという嬉しい姿であろう。姿というよりも、幼児の喜びと幸福とであろう。——それに比して、芸術性のない保育の、なんと幼

児につまらないこと、不幸なことであろう。

幼児保育の芸術性は、それ自体が芸術性の持ち主である幼児から与えられず、いらないものもある。しかし、折角の名画や音楽に、芸術を感じない没趣味もないでもない。無感動の不風流漢にとっては、どんな豊かな自然美も芸術にならない。そういう先生にあっては、幼児もたまらないし、保育という貴い芸術も、功利以外の何ものでもなくなる。あじけない至りというよりも、許し難い冒瀆ともいえよう。そういうことのないためには、われら自らに芸術性の持ち主、保育をただの仕事でなく、その趣味に溶け込み、うつとりと酔い得る性を持つ人でなくてはならぬ。言いかえれば、保育を何のためにし、如何にせんと考へるほかに、保育を楽しみ、保育に没入し得る人でなくてはならぬ。そういう先生と幼児との間にのみ、何ともいえない保育芸術——保育学、保育事業、保育技術以上のもの——が創作されたのである。その保育そのものが芸術になるのである。その場合、その先生の心境は、画家が描き、音楽家がうたい、詩人が詩作するのと同じであり、恍惚として我をその生活のうちに満たしつづけるであろう。

前に、コメニウス、バセドウ、フレーベルの保育画面を偲んだのも、そうした美術的価値にほかならない。それらの画面には、幾

多の大きい価値が含まれていると共に、一大芸術としての渾成に頭が下がるのである。

ただし、これらはいずれも稀世の大芸術品である。そんな大作でなくとも、小品は小品なりに、短章は短章なりに、小さいながら純芸術品の本質をそなえるものがある筈である。こうした芸術性が、幼児のあそびを觀察している瞬間にも、幼児の爪をとつてゐる窓ぎわにも、幼児の自由画の手書きを見つめている机の上にも、ふと動き、しみじみとつづいて貴い小芸術品を成すことがある。もしそれが日々に連続し、園一ぱいに拡がれば、その人は、身を以て保育を芸術的に創作しつづけている人となる。たまに色のぬりそこないがあり、線の描き誤りがあつたとしても、その純乎たる芸術創作としての価値は、ただ正しく、ただ細緻に、ただ上手なだけの非芸術品にまさること、如何に大であろう。そして、その美しい作品は、古典の大作に例を求めるまでもなく、若い保育者の、その日その日の保育の中に見出されるものである。——ただ、現代的な保育画面が、徒に大がかり大仕掛けであるのみで、粗大、空虚、頓と芸術性の乏しい憾みが稀でないのを、なげかずにはいられない。

再び初めの問い合わせる。あなたのどこが真に幼児教育者なんか。何があなたを眞の幼児教育者にならせるであろうか。つまり

は、幼児保育者の幼児保育者の真諦は何なのであらうか。

前にしばしば、名画名音楽といったことから例をとる。レントラントは名画を制作した芸術家であった。ベートーベンは名音楽を作曲した芸術家であった。ただ絵描き、ただ作曲家ではない。

芸術家であることが、その本質であったのである。勿論、絵と音楽において、その芸術性を發揮した。しかし、芸術家たることが、その奥底の真諦であったのである。こうした特異の大芸術家を例にとらないでも、芸術家が描いた絵だけが眞の芸術であり、芸術家が作った作曲だけが眞の芸術であることは論を俟たない。

そこで、あなたは幼児保育者という人間芸術家である。人間を最も深いところ、最も純なところで相手とするものは皆人間芸術である光景である。

## "幼児保育の芸術性" をめぐつて

森田 宗一

いつも私が「いいなあ」と思いよく話すことは、しあわせ感に満ちたお母さんが"イナナイナイバー"と赤ちゃんをあやしてい る光景である。

お母さんは幼い子どもをみつめながら顔一ぱいに笑みをうか べ、時には百面相しながら"イナナイナイバー"とやる。赤ちゃんはそれに応えて、顔を一ぱいに笑でうずめてニコニコギャッキ ャッとする。手も足も体全体を動かして笑う。その光景のなかに母と子のすばらしい人間的な出会いが、躍如としているよう思 う。

人間が最初に人間的な情緒やしぐさを学ぶのは、お母さんのお

あるが、他の場合は芸術的なだけには止まり得ないことが多々あるとしても、幼児を相手とする場合は、その芸術性は最も深いといえないかも知れないが、最も純なるものである。その最も純な芸術性が幼児保育の真諦であり、あなたの芸術性があなたを真にそ真に幼児保育者なのであると、こう答えるも過言であるまい。少なくとも、あなたの保育を真にし大にし高貴にするものは、あなたとの学問性、社会性、教育性のほかに、あなたの芸術性（ここでわたしの言う意味で）あらねばならない。

(昭和二十三年六月「幼児の教育」第四十七卷第六号)

乳をのみ、イナインアイバーをしているころの母子関係の中にある。そのころの家庭においてである。まことに幼時における母子関係、そのころの家庭こそ、人間にとて最も大事な最初の学習である。だからそういう母子関係や家庭こそ、人生の最初学歴と呼ぶべきである。この最初学歴は一生人間につきまとい、最終学歴よりもはるかに重要なものなのである。ところがお母さんあるいは保育に当る人の心が心配ごとで一ぱいだつたり、子どもとの出会いに不幸福感を持つていてみると、そのイナインアイバーが自然でないものである。お母さんは無理になかば義務的にやるが、子どもは笑わない。顔をゆがめてニガ笑いしても全身で笑わないのだ。お母さんのイナインアイバーには、リズムがない。情緒を動かす力がない。いわば芸術性がないのである。

またお母さんや保育者が自然を見、花を観賞し、ああ美しいなあと感動し、小鳥や虫を愛し、その生命の不思議に感動する心が豊かであると、それはすぐ幼い子どもの情緒の肌に影響する。ところがお母さんが、物事に感動する心がなく、かたい雑な感覚しないと、そもそもそのまま子どもの心に影を残し、あとで取りのぞくことが困難になる。

青少年期や成人になって、いろんな問題行動にはしり、人間関係の感度が悪く人とうまくいかなかつたり、物事に感動する大切

な心の乏しいことなど、その生活歴をさかのぼってみると、幼いころの母子関係、保育の関係に問題のあるものが多い。人間の芸術性を培うには、大きくなつてピアノを習わせたり油絵をかかせたりすることよりも、幼時における情緒豊かな母と子のふれ合い、その間柄がはるかに大切である。その一番つよい影響力は家庭のふん開氣であり、母親の心情なのである。

子どもは一歳ぐらいになると、母親から一步二歩と離れ、自分の二本の足で立つて歩き、手を使うようになる。この瞬間こそまさにほんとの人類の誕生といつてよい。人間はほかの動物と比べて一年ばかり早産しているという（ポルトマン博士）。何のために早産しているのか。母のもとで人間性の基本、情緒の基本を学び身につけるためであるといふ。

歩き始めたころの子どもの姿を見ていると、ほんとにほほえましく感動的なものである。「山のあなたの空遠く幸い住むと人のいう」という有名なカール・ブッセの詩を連想させるすばらしい子どもの前向きの姿である。自分の足で立つて空が見え山の向うを見ようと前に進み、手をより手で物をつかもうとする。草花にさわり小虫や小動物とたわむれるのを楽しみ、やがてその手で、絵を書き、ものをつくることに興味をつよくする。そういう時の子どもは、ほんとにうれしそうだし幸福そうである。人間の文

化の初まりの太古の時代をも連想させる。人生において芸術心はまことに重大なものだが、一歳じるから二、三歳じるの子どもの

自然とのふれ合いの中に、大きな力が秘められている。そういう時の保育者（母もしくはそれに代る人）の心情や子どもの扱い方がまたきわめて重要なことなのである。

このごろの世の中は、右のようなことに無感覚で無慚に子どもから奪ってしまっている。ほんとう心ないことだ。そして母も保育者もそれに狎れてしまっている。子どもから自然や遊びを奪うこととは、結局人間性をこわしてしまうことになる。子どもの心の

感動やリズムをそこなってしまうからである。このごろの保育は、そういう子どもの心を大事に保ち育していくことではなく、何かの中に捕へこみ押しこんでしまう、捕育に堕している。したがって教育も、教育ることでなく、狂育になってしまっているのではないかと思う。

さて、倉橋先生の「幼児保育の芸術性」を読みかえして新しい

感動を覚える。そこにはほんとうの幼児保育の真諦が美しく述べられている。保育は大人の思い通りに、捕育したり単に保護したりすることではない。幼児の育つ力から発するリズムを育てること、つまり芸術性によるものだという。そしてそれは愛ということであり、「愛こそ最も高貴な、美しい人間芸術なのである」<sup>「芸術性の</sup>

ない保育のなんと幼児につまらない不幸なことであろう」といわれる。

私もこのごろしみじみ思う。眞の保育は子どもの本性のリズムと感動をひき出す芸術にはかならない。そして感動とリズムをもつて幼児に接する保育者と幼子とのいきいきした出会いの中に、子どもはすくすく育っていく。そのこと 자체が何ものにもまさる芸術なのだ。

## 川崎 千束

子どもの心は常に動いている。

動いているからこそ、ときどくすると、あるものに向かって、ひたむきになれるのである。

平安の昔でも、さすがに清少納言は、この子どもの心理を次のように描写している。

二つ三つばかりなるちごの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵ありけるを、目ざと見つけて、いとをかしげなるおよびにとらえて、大人などに見せたる、いとうつくし。

今も昔も、子どもの本源の心理は変わらないのだろうが、子どもの心をどう捉え、どう扱っていくかが、現代的な解釈とし

て、重要な課題となつてくる。

子どもの動く心に、大人が波長を合わせての日常生活があり、ときとして、子どもが、ひたむきな激しさをもつて向かったものに、共に燃え、その双方のあい合う波長と熱気によって、子どもたちの一コマ一コマの生の歴史がつくられていく——そんなものを保育の芸術性と私はいいたい。

大人の心はややもすると沈滞し、その沈滞したもののが、教育というわく組みの中に逃げこんで、身辺のものにたえず心を動かして活動する子を“落書きのない子”ときめつけ、ひたむきな情熱を“しつけ”という名で弱らせてしまう。残るものは、大人のご都合主義によって立てられた教育目標の形骸だけになるであろう。このような心の衰えてしまった保育者には保育の芸術性は望むべくもない。

倉橋先生は、幼児保育の芸術性の章にこう記されている。

教育の理想は、目的と方法だけでは、一人の幼児をも抱くことはできないし、幼児を親しませることも出来ない。(中略)

保育者の心を衰えさせず、いつも心を柔らかくし、子どもの心にからんからんと響き合う弾力あるものにしておくには、まず“教育”的概念から離れること、これが第一義である。

子どもと一緒に砂のお団子を握り、子どもと一緒にかけ出す。

そうすることによって子どもの心の弾力が保育者にも伝わってくる。象のギニヨールの動かし方を工夫しながら、子どもたちの演ずるさるの役の言葉に応じることによつて、保育者の心は若やぐ。ころんだ、ぶたれた、あれが欲しい、と流す涙、それらの子どものかなしみの涙を知ることによつて、子どもの幸福というのが理解されてくる。子どもと一緒に、シャングルジムに登り、鬼ごっこをしながら、ふと仰ぐ雲、それによつて想像力の渇渴から救われるのである。

十月の風の朝には、学園の構内に椎の実が数多くこぼれ落ちる。それを拾い集めるのが子どもたちの秋の朝の楽しみである。“どんぐりは帽子を冠つてゐるけど、椎の実はスカートをはいてるわねえ、先生”

ホラ、と実物を目の前に引き出さて、椎の実がこんな外皮に包まれていることを知らなかつただけに、保育者にも新鮮な発見であつた。外皮を脱ぎかけたものを“スカートをはいてる”とは何と適切な鋭い表現であろう。

枯枝を拾い集めて急造の炭をつくり、フライパンで、めいめいが拾い集めた椎の実を供出して炒る。炒る、皮をむく、食べる、この一連の作業を子どもたちは真剣に続ける。三歳の時には、落叶の中から椎の実を見つけだすことさえできなかつた子が、四歳

今は、割箸で一粒々々炒った椎の実をはさんで、友だちの掌にわけ入れている。一ヵ年の成長の姿である。秋の日はゆたかにこの子等の頬を照らし、ミレーの絵に見られるようなこの情景が、

保育者の心を素朴にかえらせ、敬虔なものがすがすがしく心に流れてくれる。

水道の蛇口についたホースを、すっぽりと砂の中に埋め、その

ホースの先を土管につなげ、更にその土管から細い二本の土管に分岐させて水が流れ出るよう工夫し、砂山の頂の湖らしいものに、その水を底から湧く泉のような仕掛けで水を注ぎ入れる。これが四月に入園した男の子五、六人の、小半日の労作である。普通の池どちらがい、底から噴出する仕掛けなので水は濁らず、滾々と湧いて静かに溢れている。そこが苦心のしどころで、箱根の寮に合宿した時、船で渡った芦の湖の再現であろうか。大人の知恵の及ばない領域である。

東山魁夷画伯はその画集の中で

「あなたは、幼児保育者という人間藝術家である」倉橋先生は、このように述べているが、本当に私たちは幼児保育者として該当するだろうか。

時代も変わり、世の中も日に日にあわただしくなってきている。けれども、子どもの持つている本質的な子どもらしさ（藝術性）は、どんな時代においても普遍であると思う。この「子どもらしさ」を持つてゐる子どもを、一瞬のうちに発見し、そしてさらに、うわべだけ子どもらしさを持った子どもと見分けることができる幼児保育者であり、また、「うつとり」と酔えるような幼児保育者でありたいと思う。

それには、幼児保育者にしかなれなかつた人ではなく、高いアソテナを持つた、感受性豊かな、その上、知性も教養（常識）もあるすばらしい人にこそ、幼児保育者になつていただきたいと思ふ。このように、優秀な人材が競つて幼児保育者になりたがるよう、そんな社会が一日も早く來るように、私たち幼児保育者が努力していかなければならない。

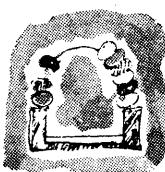
この紙を、子どもと置きかえて、そんな心意氣で朝毎の幼稚園の門をくぐり度いものと念願している。（一九七四・一〇・二二）

山道 隆子

（お茶の水幼稚園）

## 幼児との出会い

長山篤子



毎月配本されます「幼児の教育」の中には、素晴らしい幼児との出会いの体験や、素晴らしい人の出会いの尊さをたびたび紹介され、この本との出会いを今更のように大切にしたいと思っているところです。

私も保育者として幼稚園の子どもたちと目の覚めるような出会いをいくつも重ねて参りました。その一つ一つが今私の私を支えてきているように思います。また母親として自分の子どもたちと喜びに満たされるような出会いをしてきました。そして、それは、私が挫折した時に生き生きと生きていくことのできる力となって私を力づけてくれています。

現在、私は、このような出会いを支えに、またもう一つ異なった立場で幼児たちに会っておりまます。一つは、私の勤めております保育養成機関の学生の実習の場で、他は、二ヵ所の幼稚園の先生方と「明日の保育」を考える学び合いの会の中で、またこの会の資料となる子どもの遊びの記録をとる場で、わくわくする思いで幼児に会っておりまます。学生との実習の場で触れ合う幼児とは、まだ時間が浅いものですから私に迫ってくる出会いを記すことができませんが、幼児の遊んでいる姿に触れつつ記録をとらせていただております方は、四歳児に一年半接してきました。少しづつ彼らとはだを触れ合うにつれ、彼らの出会いが、

私にいろいろな形で迫って参りました。また、この記録を

してしまふんだよ」

資料とした先生方との話し合いでは、幼児の成長の素晴らしさ

皆静かに息をこらして小屋の網に顔をつけている。

「こんな力がこの子にあつたのだろうか」とか「このよ

E子「あーあ早くヒヨコみたいナー」

うに成長しようとしていたのか」「このような受けとめ方

K「あつ鶏のお父さん見えた。ヒヨコも少し見えた」

をした方がよかつたのか」など新たな思いで幼児を見つ

I「ヒヨコ、お母さん出してーつていつてるよ、あつ出

め、「明日の保育」の生きた計画案となっております。一

M「あつお父さんがえさを食べた。お母さんさ、食べさせろ」

回一回が大変貴重な話し合いで、その時の気持ちは、なか

なか紙面では十分に書き尽せませんが、その中から、いく

つか出会った幼児の姿を記録に合わせて記してみたいと思

B「お父さんはダメ、お母さんが食べないとだめな」

E子、しばらくヒヨコに見とれていたが溜息をついて

「ひよこよくうまれたね」。ほんとにきれいに。ほんとに

きれいによくうまれたね」感きわまつたようすで網あみにしが

みつく。

六月四日 T園庭にて E子ちゃんの溜息=感動 〈記  
録抜すい〉  
"ひよこよくうまれたね"

チューリップの茎についていたあぶら虫を見ながら会話

C「赤ちゃんにも食べさせろ」

E子「今日はヒヨコのお誕生日ね」

していた子どもたちの所に「ひよこが生まれたよ、ピヨピヨいってるよ」と先生が報告に来る。みんなワーコと歓声をあげて鶏小屋の前に集まる。

先生「シー 静かに。お母さん鶏が安全だなと思ったら、きっと散歩に出すよ。さわいでこわがると羽の下に隠

るようになつた「ヒヨコよく生まれたね」という言葉に心を打たれました。E子ちゃんの感動が伝わつてくるよう

で、生まれてくるものの感動と喜びがE子ちゃんに溢れておりました。溢れるような感動は自然の中から得られることを教えられた一日でした。

「入れてあげないわけがあるんだ」

三月四日 園保育室にて=熱中する力(記録抜すい)  
UとKと、S、Tがミルクのあきかんをたくさん使って並べているうちにロケット遊びになり、これに燃料を入れて発車させたり爆発させたりして遊び始める。

U 「ワンツースリー ぼきやーん」

K 「わーケーキになつちやつた」  
U 「またミルク ミルク入れよう」

K 「火だ 火を入れるよ」

S 「いろいろ入れるよ」 T 「油も入れるよ」

四人の動作は呼吸が合い次々にあきかんを重ねて行く。

H はしばらくそばで見ていたが、

H 「入れて」みんなだまっている。

U 「入れて」

U 「だめ」

H 「先生にいっちゃんよ」 Hは先生に報告に行く。もう一度戻って来て「入れて」という

先生「Kちゃん Kちゃん Hちゃん入れてっていつて

るよ。どうして入れないのっていつてるよ」

H 「どうして入れないの。入れてくれたっていいじゃないか」

みんなだまつて返事をしない。Hはしばらく見ていたが別の場所に行く。

先生「ごめんください。ミルク二つください」

K 「ちがうよ。これロケットだよ」

U 「一つあげるよ」

怒った表情でかんを一つ先生に渡す。先生はかんを持つてHの所に行き一緒に遊びはじめる。

K 「これより多い人だとおもしろくないんだもんな」

U 「うん、これがちょうどいいんだもんな」

S 「入れてあげられないんだよなー」

四人はHのことが気になるらしいが、自分たちが一生懸命にやって面白くなつた所なんだから、今は他の人が入れられないんだと繰り返しながらまた遊びを続ける。

私たちにはこうした場面によく出会います。そして、入れ

てあげない側より、入れて貰えない側の気持の方に気を取られてしまいがちであることに気付きました。四歳を過ぎた男児が、自分たちでつくり出した面白い遊びに気持ちをそそぎきつて遊ぶ姿に触れ、彼らの熱中した遊びの、そ

の時は誰からも侵されるべきでないことを知らされました。一つの遊びの中に注がれている力をそこに見る思いがしました。

### “着陸の仕方が悪いな——”

九月十日 H園保育室にて（記録抜下さい）

数日前から広告紙で紙飛行機を折り、飛ばし始めてい

た。最初は折ることに夢中になっていたが、飛ばし始めると、よく飛ぶ飛行機と、うまく飛ばない飛行機が出て来て、飛ばし方にみんなの関心が高まる。記録をしていた私の方にMが来て「さあ出来た、飛ばしてみせるからね、よく見ていてよ」と語りかける。

部屋のすみからすみまでとてもよく飛ぶ。

私「わあー すごいね、よく飛ぶね」

あまりよく飛ぶので驚いてしまい、私が感心しきつてい

ると、Mはニヤニヤと笑い、もう一度飛ばす。

M「あれー、着陸の仕方が悪いなー。すーと着陸しないとダメなんだよ。少し修繕してみるから待つてね」

翼のバランスが少しひどいことに気付き両方の翼のバランスをとっている。Mは友だちの飛ばし方をしばらく見ていたが

M「ちえー 教えてやるか。飛ばし方を考えるの。静かにこう飛ばすの」力の入れ方をどうしたらよいかを説明する。

M「僕のは翼はこれでよし」「おばさんみててよ」  
すみから飛ばすともう一方のすみにあつたごみ箱の中にうまく入る。

M「きやー うまくいったもんだ、どうやって入ったもんだか。どうやって着陸していくんだかー」

Mはうれしくて両手両足をばたばたさせて喜ぶ。飛ばし方の工夫を一生懸命に始める。Mにとつてきっとこの日は素晴らしい充実していた日だったようと思われました。男児にとって飛行機遊びは大変興味を示す遊びですが、この遊びが、このおもしろさが、Mが次々色々なことを発見し工夫していく力となつていることを教えられました。そし

て、私たちにもこんなにおもしろいと思う出来事がもう少し身の回りにあつたら、何か、もつと発見出来たのではないかと考えさせられてしましました。

“おめなんで泣いてるんだべ”

九月十三日 T園保育室にて Ⅱ誤解〈記録要約〉

この日は運動会に出す遊具や競技に使用するものが園庭に出され、園児のほとんどが、園庭に出て、先生と紅白に分れつな引きや玉入れをして遊んでいる。室内には、興味を示さない子どもが五名ほど残つて積木遊びをしている。いつも大の仲良しのUとDは今日は別々になつてしまつた。Dは紅白の帽子を持って来ていないので「僕帽子ないはんでやらね、行かねえんだ」……「僕の家お兄ちゃんのしかないんだ」と友だちに説明している。しばらくして競技が終わつたらしく、Uが入室してくるが、

U「あーつまんねえ、白ぐみが多いはんで赤負けたじや、本当の時は白ぐみになるかな!」

といなながらそこいらにある遊具をける。ぶつぶつ怒つているが、室内に残つていた男児の所に行き一人一人ほほをつねりあげ「おめなんで赤ぐみに入らなかつたか」と怒

る。次にDの所に行き、「お前なんで来なかつた」と聞くがDは口をとがらせてUの顔を見ている。UはDの顔をなぐりつける。Dは別の所に行くがしばらくして部屋のすみでしきしく泣いている。Uは廊下をうろうろしていたが、また入室してくるとDが大声で泣いているのであわててDの所に行く。

U「おめ なんで泣いてるんだべ」

とDの肩に手をかけて顔をのぞき込む。悲しかつたDはUにやさしくされ、つい前にいたSの方を指さしてしまふ。Uは怒つてSにくつてかかる。先生が中に入り時間をかけてUにDの気持ちを話してきさせ、やつと二人の気持ちがすつきりすることができた。大変複雑な気持ちを四歳児が理解し合うことは難しいのですが、こうした経験を通して、UとDはいっそう関係を深くして行きました。大変大きづばな記録になりましたが、この一つ一つの出来ごとが、密度の濃い人間の生活として私の生活に迫つてくる思ひがしてきます。まだこれから先、いろいろな場面を通して幼児との出会いが、私を、私の生き方を方向づけてくれることと思い楽しみにしています。

## 「自由遊びの指導」 をめぐつて

南館忠智



秋、九月から十月にかけて行われる教育実習は、筆者の勤務する大学恒例の行事です。大学で多少ルーズな生活をしていた学生であっても、いざ子どもたちと触れ合うということことで、期待と不安のいりまじった一種独特の緊張感とともに「突入」するのは、この教育実習。「教生」の経験をおもの方ならどなたでも、ほろ苦くも懐かしく思い出されることでしよう。

さて、四週間にわたる幼稚園での実習もいよいよあしたで打ち上げ、という日の午後、実習期間全体をふりかえっての反省会がもたれました。今回は、このときのようすを思い起すことから始めましょう。窓の外では、逆光をあびたコスモスのシルエットが風にそよいでいるのがとても印象的な、十月上旬のある日のことでした。

最初に発言した教生は、指導案が「教生の目」からしか作れなかつた、と述懐しました。その後で、教生からの押ししつけが多すぎた、とか、子どもの活動を予想するのがむずかしく、空まわりすることが多かつた、などの反省も出たのですが、これらは同じカテゴリに分類できそうに思います。ま

た、子どもたちに「気づかせる」より「教える」結果になりがちだった、あせればあせるほど子どもに無理じいする結果になつた、などの反省もそれと深いかかわりをもつ事柄のようです。

この他にもいろいろの話が出ました。教生の側の準備の不足から、せっかく盛り上がつていて子どもたちの意欲をそいでしまつた、という自己反省的報告。ピーティーパンの人形を活用した話しがけが子どもたちの注意を集中させるのに有効だった、とする自己肯定的報告。あるいは、班当番に着目した集団意識の高まりについての実践報告から、積極的な子と消極的な子の違いが大きすぎて指導にとまどつた体験報告、さらには、以前にもまして音楽リズム的活動の指導に対する「恐怖症」が強まつたという告白まで、じつに多種多様。

ほとんどの者が割当て時間をして発言せずにはいられない、ある種の熱気につつまれたこの会がようやく終わつたのは、コスモスのシルエットをおおう背景全体が暗さをまし始めた、日没もそう遠くないころでした。詳細についてはそろそろ記憶が不確かになつてしまつたいま、あの静かな熱気とともにきわめて鮮やかに思い浮かべられることができ一つあります。それは、ある教生の反省として述べられた、「自由遊び

場面における指導の重要性」です。この点が、筆者の心の中で、なぜ鮮明でありつづけるのでしょうか。

## 2 保育指導案から

このことに言及した教生の発言は、およそ次のようでした。クラス構成員全體が一齊に取り組む活動については、事前にあれこれ考え、また準備し、実際の指導にあたる。なかなか思いどおりに事は運ばないのが、とにもかくにも全力投球を尽す。そして、この部分がなんとか終わつてしまふと、結果についての自己評価とは一應別個に、まずはホットしてしまい、その後に計画されている自由遊びの部分は「息抜き」として費されてしまう。これではいけない、いわゆる自由遊びに没頭している子どもたちに対しても保育者としてどのようにかかわつていかねばならない、どのようにかかわつていけばよいのだろうか、と気になりつつも結果において「息抜き」に終始してしまつた——というのです。

この発言にうなづく者がいたことから、これがたつた一人の反省にとどまらないことがわかりました。さらに、後で、彼女らの苦心の作である指導案の数々を改めて見直したところ、これは実践の段階で初めてあらわれるのではなく、すで

〔表1〕

時 間	活 動	ね ら い	指導上の配慮
九・一五	●登園する。 ●当番・係は仕事をする。	●グループの仲間を誘い、さつさと仕事をすることができる。	
九・三〇	●後片づけをする。	●お話し(「あんばんまん」)を聞く。	●グループ毎に皆の前でする(他のグループは助言する)
九・四〇	●まとめてゲームの練習をする。 ●導入:一度まとめてをしてみると。	●気分転換をはかることができる。	●クラスで教え合うことができる。
一〇・四〇	●まとめてのうまくできない子を明らかにする。	●一人だけが頑張つてもダメだということを強調する。	●非協力的な発言の目だつ子には、この時点においては「教えなくてよい」とする。
一〇・五〇	●後片づけをする。	●自由遊びをする。	●「ができる。」
一一・一〇	●降園する。		
一一・三〇			

●個人攻撃にならぬよう配慮する。 ●グループ内で循環指導をする。	に計画すなわち指導案作成の段階で「ネタがまかれている」ことがハッキリ見て取れるのでした。たとえば、こんな具合なのです。「表1」をご覧ください。これは、ある日の二年保育年長組の指導案です。

蛇足をつけ加えるなら、九時四〇分からの「まとあてゲームの練習をする」活動については、「ねらぐ」欄、「指導上の配慮」欄ともキチンと記載されており、その上、ここでは割愛しますが、三ページにもおよぶ細案まで用意されています。これに対して、一〇時五〇分からの「自由遊びをする」はどうでしょう。細案などなく、ご覧いただくとおり、じつにスッキリ（？）したものです。

### 3 自由遊びと保育者の指導性

教生たちは貴重な経験を積んで、しかも未解決の問題をたくさんかかえて、大学に戻ってきました。かなり未消化の問題意識と、そしてまたかなりの疲労とともに大学キャンパスに帰ってきた彼女らを待ちかまえているのが、卒業論文を仕上げる仕事です。ここ二ヵ月ちかく遠ざかっていた、懐かしくも手ごわい「強敵」と再び取り組まねばなりません。しめ切り日が数ヵ月先にせまっているのです。当事者としての「教生」時代の経験を、それを客観視できるはずの「学生」という立場から、反すうし咀嚼しなおすゆとりをもてないわけで、残念に思います。

こんな次第で、「自由遊び場面における指導の重要性」に

ついても、討論を深め合う機会をつくれぬまま、きょうに至りました。これから以下は筆者の個人的見解になります。

自由遊び場面における指導の重要性。正直なところ、このテーマにかかわり得る問題点は少なくなく、また多岐にわたっていて、とても快刀亂麻を断つような離れ業はできそうにありません。そのむずかしさは、たとえばこうです。

このテーマを耳にした方々から、いつたい、自由遊びとは何か、どのようなものとして把握しているのか、という質問が出るのはほぼ間違いないところで。そして、十分に納得していただくためには、「自由遊び」の概念規定をしただけではダメで、子どもたちの活動をとらえるカテゴリ全体をキチンと示すことが不可欠となるでしょう。

この点、納得がいった、となるとすぐ次に、では、それら（複数個）の活動カテゴリを、どのような原則にそつて、どのような手順で有機的に体系づけていくのか、と来ることだけ合いで。関連質問として、その際の原則や手順は普遍性をもったものかどうか、もしそうでないとしたら、どんな条件のもとでどのようなバリエーションを考えればよいのか、その根拠は何か、と問われるかもしれません。

また、指導という側面からの質問も殺到するでしょう、幼

幼稚園の場で「指導」などとはけしからんとする詰問タイプ

から、指導おおいに結構、さてどんな特質をもつた指導？という純粋な質問まで、その「振幅」は大きいはず。その上、どのような発想法からこれらの質問が発せられるのか、その関連性をも合わせ考えると、両者のからみ合いはじつに複雑。

以上かいま見た幾種類かの問題点は、多岐にわたると言うよりも、深いところで同じ根につながる相互に関連したもの、と見なすのが妥当かもしません。となると、その根っこエックスを探し当てる「かぎ」を入手できずにいる現在の筆者にとって、残された手は「お手上げ」ということになってしまいます。

#### 4 自由遊びと指導は矛盾するか

手詰まり状態から抜けだすために、窮屈の一策を採用することにします。これまでゴタゴタ述べてきた部分（3）をここで一応「ご破算」にしていただきましょう。その上で、白紙の上に、子どもたちの展開する「自由遊び」と、保育者の行う「指導」とを並べます。次に、可能な限り懐疑心を抑えてください。さて、気楽に連想ゲームです。「自由遊び」

と「指導」。

いかがですか。どうも連想がわかない、違和感が先に立つ、と首をひねっている向きが少なくないようです。中には、ズバリ「矛盾」を連想された方もおいででは。「その方、いただき！」と言うのは、いささかテンにかけたようで恐縮なのですが、ここに、以下の考察の出発点をおきたいと思います。すなわち自由遊びと保育者の指導とは矛盾することなのかどうか。

筆者の見解はこうです。それを矛盾するものとは考えない。もっと有り体に言えば、矛盾するものと考えたくない。となります。そんなこと当り前ではないか、と一笑に付される方、ちょっとお待ちください。こちらからお尋ねいたしました。なぜ当り前と結論づけられるのでしょうか、その理由をお聞かせください。時として、結論よりもその過程のほうがより重要なことを、筆者は知っています。（この点、第一回を参照ください。）結論が出ていてからそれでいいではないか、という論法にはどうもなじめないです。

2で引用した指導案における自由遊びの扱いと、1で述べた自由遊び場面での指導の重要性の指摘に、改めて注目してみましょう。反省会で発言した者と指導案を作った者とは別

人ですので、論の進め方がいささか強引のそりをまぬがれ得ないのですが、ここで両者が同一人だったと仮定してみます。この仮定が評されると、自由遊びを展開している子どもたちへの保育者のかわり方について、理念と実践との間に大きなギャップが存在することになります。筆者が強引を承知のうえで「継ぎ合わせ」をしてみたのは、これと同類の保育者が現実に少なからず見受けられるからに他なりません。

このギャップはどうすればよいのでしょうか。一斉活動の場面なら指導案を一つ用意すれば事足りるけど、自由遊びとなつたらそうはいかない、子どもの数だけ指導案を作るなんでも不可能だ、だから——という理屈づけは「良心的」なのでしょうか。そしてまた、不可能だからこそ忘れる事のないよう、機会あるごとにハッキリ意識しなおすことこそ、現実的にして最善の方法だ——という論法ははたして最善のものと言えるでしょうか。このように考えると、理由をキチンと述べることなしに「当たり前」と済ましてしまうやり方が、ますますインチキなものに思えてきてしまうのです。

## 5 なぜ両者は矛盾ではないのか

威勢のいいことを言つてしまつたてまえ、自由遊びと保育

者の指導を矛盾しないと考える（考えたい）筆者自身の理由づけをしなければなりませんまい。自分なりに十分納得できるまで練れていないのですが、「予感」をまじえつつ述べてみましょう。

まず第一は、やや消極的大がオーソドックスな理由です。自由遊びといえども、幼稚園という意図的・人工的な場において、しかも保育者の計画のもとになされるからには、原則的には他の活動と同列の手順をふんで発想され位置づけられて当然のはず。「ねらい」欄が「プランク」「指導上の配慮」欄も「ランク」というのは、したがつて、理解に苦しむところ。ねらいも配慮もない、保育者不在の「真空地帯」を、園の生活の中に積極的・意図的に設けるべきだ、というご意見をお持ちの方がおいでなら、一度ご教示をお願いしたいと思います。

先生と一緒に活動が長く続いてはかわいそうだ、その後には必ず緊張解決のための「真空地帯」を保証してやらなくては、とおっしゃる方。どこかで大変な思い違いをされてはいませんか。たとえば、一斉活動を「勉強」に見立て、自由遊びを「遊び」に見立てるような。あるいは、保育者と一緒に「真剣」だから「疲労」し、子どもどうしだと「不まじ

め」だから「氣休め」になる、などと。もしさうだとしたら、緊急に考えなおしが必要だ、と思います。事はすでに自由遊びという範囲をこえて、保育全体にかかる大問題にまで発展してしまっている、と思えてならないからです。

第二点を急ぎます。より積極的・意欲的な理由と言いたいところですが、まだ海のものとも山のものともわからない、と言うべきでしょう。説得的な説明などできそうにない現状なのですが、この自由遊びと指導をめぐる考察を深めていけば、子どもの「興味」の位置づけにかかる諸問題に新しい局面が開けるのではないか、そんな感じがするのです。こんな見極めのついていない事柄にあえて触れるのは、「興味」に大きく寄りかかった保育理論ないし保育実践にどこか違和感を感じずにはいられない筆者の「へそ曲がり」のなせる業です。

前回、「発達段階に応じた指導」にひそむ弱点、ないしレディネス探知的アプローチのはらむ危険について私見を述べました。その根源はひと口で言えば「変容メカニズム解明といふ視点の欠如」にある、とも述べました。これと同じ体質を「興味」という概念の中にも感じるのです。このことばは、「興味をもつてゐる」と使われる際の滑らかさに対しても、

味をもつようになる」という場合、どことなく滑りが悪くなります。前回の用語で言えば、どうも「形成的」なニュアンスの薄さはいなめないようです。

それで、このことばに代えて、たとえば「必要感」とか「要求」とか、まだ成案はないのですが、そのような捉え方のほうが生産的ではなかろうか——などと考えている筆者にとって、「自由遊びおよびそれへの指導」は新しい魅力をひめたテーマに見えてきてしまうのです。園の門をくぐったとたん、実生活の場とはあまりにかけ離れた「人工的」場が（いい意味でも悪い意味でも）待つている現実を思うとき、その魅力は一段と大きく感じられます。最終的な結論を引き出すまでに、ジックリと暖めてみようと思います。

(三重大学)

## 洋書紹介

Just so Stories

by

Rudyard Kipling

Doubleday & Company, Inc.

Garden City New York

Copyright 1902, 1907

江波 謙子

とあります。

なぜ、こんなに古い本をハリス教授が、カナダの湖にある小屋に持つていらしたのか私にはよくわかりません。ただ覚えておりますのは、果てしない原始林に囲まれたクリア湖で休暇を過ごしたある夏の夜、ガスランプを灯もして、うす暗い小屋で教授が読んで下さったこの物語を一度で私は好きになってしまったということです。

“Just so Stories”を日本語的に表現してみますと、「つまりそういうわけなのです」とか、「そんなわけお話集」とでもなりますか。けれど私は、どちらかといいますと、この本に、日本語で「古い、古いお話集」といった題をつけたいような気がいたします。

この本の中には、十二のお話があります。十二のいずれも大変古くて、おもしろいのですが、同時に、どのお話も大変日本語に訳しにくい共通点をもっています。今回はこの中から二つのお話を紹介しながら Kipling の作品の特徴と、子どもにとって真に Fun—おもしろい—とは何かということを共に考えます。

古い、古い本を一冊とりあげてみました。黄ばんだその本の扉を開きますと、

——クリア湖でこの本を  
さがし出したジョンコヘ ハリスパパ・ママより——

ラクダはどうしてこぶがあるのでしょ

歴史が始まったころ、世界がまだすべて新しく、動物たちがちょうど人間のために働き始めたころでした。一匹のラクダがいました。ラクダは、ものすごい砂漠のまん中に住んでいました。というのは、彼は働きたくなかったからです。その上ラクダはほえる獣でした。彼は棒や、とげや、ぎよりゅうや、やま人参や、いばらを食べていました。誰かが彼に話しかけると、彼は「フンフン」とただいつて他に何もいませんでした。月曜日の朝、馬が背中に鞍をのせ、口にくつわをくわえてラクダの所へやつて来ました。そしていいました。「ラクダさん、ねえラクダさん、出ていらつしやい。そして私たちのように歩きなさいよ」けれどラクダは「フン」といつただけです。馬はいつてしまい、このことを人間に伝えました。まるなく犬が口に棒をくわえてやって来ました。そしてラクダにいうのです。「ラクダさん、ねえラクダさん、出ていらつしやい。そして私たちのように運びなさいよ」けれどラクダは「フン」といつただけです。犬はいつてしまい、このことを人間に伝えました。やがて、牡牛が首にくびきをつけて私たちのように耕しなさいよといふのですが、やはりラクダは「フ

ン」というばかりです。馬と犬と牡牛は三日目の夕方、人間に呼ばれ「おまえたちにはすまないが、あの『フン』というやつは働くことができないらしいから、お前たちに二倍働いてもらいたい」といわれます。けれど三四はそれではすます、世界はまだまだ新しい、何もないのだから、どうしたらラクダも働くかを相談し始めました。そこへラクダがやま人参をくわえてやってきました。ラクダは三匹をみて笑って、「フン」といつて去つて行きました。  
まもなくしますと砂漠のふしぎなデジンさまが、ちりの煙にまかれながらやつて来ました。三匹はラクダのことをデジンさまに相談しました。デジンさまはラクダが月曜日の朝から何の仕事をしていないことを聞き驚いてしまいます。デジンさまは、「ラクダは他に何かいつているか」と三匹に尋ねますと、「ただ、フンといふばかりです」と三匹は答えます。それをきくと、デジンさまは、ほこりのマントに身をつぶんで、ものすごい勢いで砂漠を横切つていきました。デジンさまはラクダをみつけ、「お前は世界がこんなに新しい時に、未だ何も仕事をしていないときいたがどういうことなのか」と尋ねました。ラクダは相変らず「フン」といつただけでしたので、デジンさまは、あごに手をあててラクダにおしおきを考えます。ラクダは相変らず「フン」といつています。「わしがおまえだったらそんなことは二度といわないと

しはお前に働いてもらいたい」とデジンさまが「う」と、やはりラクダは「フン」といいました。

しかし彼がそれを「うやいなや、ラクダの背中はブーブー」と

くれあがりました。デジンさまは「わかつたか。それはおまえが働かないで自からつぶつた『フン』（英語ではラクダの背中のこぶのことをフンといいます）だ。今日は木曜日で、おまえは月曜日以来何も働いていない。さあ、これから働きに行くのだ」ラクダは尋ねます。「どうしたらよいのです？」デジンさまは「いいました。『その背中のこぶでわかるだろう。おまえは丸三日も無駄にしたのだから、今日から三日間、何にも食べないで働くかねばならない。おまえはそのフン（こぶ）で生きられるのだから。さあ、砂漠を出て三四の所へ行きなさい。そしてそこのファンをつっしみなさい』

こうして、この日からラクダはいつも「フン」（つまり今ではラクダの背中のこぶのことをさし、ラクダの感情を害しないようにしています）を体につけているのです。しかしラクダはまだ決して、世界の初まりに彼が失った三日間をとりもどしておりません。

## おはなし 2 象のこと

まだ象が長いお鼻をもつていなかつたころ、好奇心の強い一匹の象の子どもがアフリカに住んでいました。お父さんのだ鳥や、おじさんのキリン、その他大勢のおじさん、おばさん、兄弟に、自分が見るもの、きくもの、におうもの、感じること、触れるもの何でも、かんでも尋ねました。そしては、みんなに叱られました。

ある日のこと、「わには夕食に何を食べるの？」と聞いて、また叱られてしましました。すると、コロコロ鳥がグレイト・グレイ・グリーン・グリーシー・リンボーポー川に行って搜してみるよういいました。象の子どもは、家族に別れを告げてアフリカ大陸を渡り、一人旅を続けます。川の堤でにしきべに出会いました。象の子どもは、しばらくしてやつとのことで、わにに会うことができました。象の子どもはわにに尋ねました。「夕食に何を食べるの？」すると、わには象の子どもにおそいかつてきました。そこへ、さうきのにしきへびが現われて、「出来る限り、体をひっぱりなさい。そうしないとわにに川の中へひっぱりこまれてしまうぞ」と教えてくれました。象の子どもは、力のあるつ

たけひっぱりました。すると鼻が次第にのびてくるではありませんか。にしきへびも手伝ってくれたので、わによりもふたりの方が強く、とうとう勝つてしまいました。けれど、象の鼻はすっかりびてしましました。象の子どもは、グレイト・グレイ・グリーン・グリーシー・リンボーボー川に鼻をひやして縮むのを待っています。けれどそのうちに、長い鼻はいろいろ便利であることに気づきます。飛んで来て刺すあぶを追いはらえるし、草むらから草をとって、きれいに泥をはたきおとすこともできます。それから、木の上の果物も食べられるし、それにその長い鼻で、今まで叱られてばかりいた家族を今度は反対に叱ることもできると思いました。

象の子どもは、長い鼻を短かくするのをあきらめて、アフリカ大陸を渡り家族のもとへ帰つてきました。そして、長い鼻がどんなに便利かみんなに見せてやり、長い鼻でいっぱい見せました。象の家族は、すっかり長い鼻が気に入り、ひとり、ひとりグレイ・グレイ・グリーン・グリーシー・リンボーボー川へ行つて、わにから長い鼻をいただきました。それ以来、誰も叱る人はいなくなり、今、皆さんが知つている象は、みんな鼻が長いといふことなのです。

以上、二つのおはなしをご紹介いたしましたが、このほかに、

「くじらはどうしてのようなどを持つようになったか」、「ひょうはどうして体に点々があるのか」、「最初の文字はどうして書かれたか」、「アルファベットはどうしてつくられたか」などが、いわゆる「なぜなぜ教室」で答えるような科学的な答えでは決してなく、非常にダイナミックで空想的な内容でおはなしが進められています。ひとつ、ひとつのおはなしをお読み終えるごとに、思わずにつこりとしてしまい、これまで自分をとりまいていた限られた空間的、時間的世界のわくがくずれ、どこか広く遠い世界に漂い始めた感覚をえています、子どもは常に、現実と空想の世界をさまよつており、ある時は非常に科学的、認識的な知識を与えることも必要です。しかし、先にあげましたような種類の疑問を子どもが抱いた時、子どもは一体、どんな答えを求めているのでしょうか。それは、子ども自身にもわからないかもしれません。けれど、いすれにしてもその子どもが抱いた未知の事象に対する関心の大きさに対応しうる内容をもつ答えを与えてあげることは大切だと思えるのです。そのような意味で、キップリングの作品は、子どもが期待していた以上のおもしろさをもつていてるように思えます。そして、子どもの心の中に無意識のうちに潜んでいる本当のおもしろさへの憧れは、彼の作品によってある程度満たされるのではないかでしょうか。

(十文字学園女子短期大学)

## 出会いその二

### 赤間峰子

エリザベス・ストロームさん

皆さんご記憶と思いますが、周郷先生とご一緒に私がストロームさんを釜ヶ崎の“家庭保育の家”（今はもう少し立派になつて、その名も西成ベビーセンターというそうです）にお訪ねしたのは一昨年（二月でした）。私はそれまで全然、ストロームさんのことは知りませんでしたが、周郷先生は、雑誌や、テレビなどでも知つていらし、日本人のできないことを釜ヶ崎という特殊な地域でいらっしゃって、詩を作つていらつしやる方だということを私に話してくださつたのです。それで“一度ぜひ会つてみたい”とおっしゃいました。おひるごろ大阪につい

やる周郷先生のお話に、”まあ手紙を書いてみましょう”と筆をとつたのがそもそもの発端でした。

ところがやつとさがしあてた“釜ヶ崎家庭保育の家”的玄関を開いたとたんに

出でいらしたその方、私は本当に、ホッとしてました。大柄な清潔な感じの、そして上手な日本語を話される“おばさん”でした。えんじ色のセーターに黒のスラックス、そしてストロームさんの部屋とし何日にもうかがいますとまた葉書を書きました。私はまるで小学生の遠足のようでした。そこおひるねをしている細長い部屋の一端にまちかねて当日は朝早い新幹線に乗りました。先生は小田原から例の番玄関よりのところにこたつがおいてある、そこがストロームさんの部屋のようでした。

お返事は思いがけず早く届きました。もちろん保母さんがお書きになつたものでしうが、ていねいな地図と、都合のいい日とを知らせてくださいました。そしてすぐに周郷先生とご相談して、折返し何日にもうかがいますとまた葉書を書きました。私はまるで小学生の遠足のよう

でした。えんじ色のセーターに黒のスラックス、そしてストロームさんの部屋とし何日にもうかがいますとまた葉書を書きました。私はまるで小学生の遠足のようでした。そこおひるねをしている細長い部屋の一端にまちかねて当日は朝早い新幹線に乗りました。先生は小田原から例の番玄関よりのところにこたつがおいてある、そこがストロームさんの部屋のようでした。

あの時の先生とストロームさんの対話

て、駅で昼食をすませて地下鉄にのり、動物園前でおりてからのことには前に書きましたので省略いたします。でも、私にとつてはやはり、ストロームさんて、どんな方だろう。日本語はお上手かしら… …とお目にかかるまではとても不安でした。

は、本当に印象深く、私は一生忘れないと思います。そしてお別れする時に、先生は玄関のすみにつんであるおみそを一袋、"ぼくはみそ汁、好きだから"と買わ

れました。いくらか資金の足しになるのだそうです。いただいた、"金ヶ崎はワタシの故郷"を帰りの新幹線の中で読んで、並大抵のご苦労でなかつたことを知つたのですが、それにしては淡々と話されたあの態度、なぜかとても心打たれるのです。でもそのストロームさんが、一番強い口調でいわれたのは"日本には福祉育ちません。歴史、ないからです"ということでした。その日本で、ストロー

ムさんはまだ頑ばっていらっしゃいま

す。昨年はお母さまがなくなられ、その後ドイツに帰られたそうですが……時

時送られてくる"かまがさき"という新聞には、地域になくてはならない人になられたストロームさんのあり方がしのば

れて、またきっとおたずねしたいと思つております。

#### 串田孫一さん

今月は巻頭にすばらしい原稿をいたしました。やはり一昨年新年号に、周郷先生と付談していただきましたのを、皆さまで記憶と思います。私は本当におつちよこちよいで、いつもあとで冷汗をかくことがまことに多いのですが、この時もこんなにえらい方に、いかにお茶の水幼稚園ご出身とはいえ、突然お電話でお願いするという失礼をしてしまったのでした。

それから、アイリッシュ・ハープのレッスンをうけていらつしやるとか……あの大柄な方がハープを持ってお出かけになるお姿を思い浮かべて、つくづく"いなあ"と思ったものです。

この時に"一度ご一緒にあまりむずかしくださったのです。それは周郷先生のおかげということはもちろあります。しかし、この時も私は勝手に有頂天になつてしましました。そのあとだんだん反省の気持ちがこくなつて、でもそのたびに串田

さんのお静かな物腰、お声に慰められるような気がしていました。串田さんとおつしやる方はそういう方なのです。本当に紳士という言葉がピッタリの方ではないかと、今でもあのうす暗い園長室のひとときをなつかしく思い出します。言葉を非常に大切に、ていねいに使っていましたこと、そしてとても聞き上手な方だ

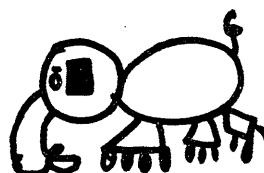
と思いました。

でも串田さんは本当に快くおひきうけくださいましたのです。それは周郷先生のおかげといふことはもちろんあります。串田さんのお言葉が、お忙しいお二人の間で、いつか実現したら……私もチヨコチヨとあとからついて行きたいと夢を見ているのです。

# 生命をかづぐつて重いなあ

## 教育の中における障害児差別について

福 井 達 雨



施設で働くのは大変や

「先生、就職の相談にのっていただけませんか」

就職期になると、私の講義をうけている学生が、何人か相談にやつてくる。

「そうやなあ。知恵おくれの施設で働いたらどうや」

と言ふと、

「わよっと考えさせてください。よく考えて決断します」

と、ほとんどの学生がこんな答をする。

「決断とはなあ、考え考えたすえにするもんやあらへんで。あるものに出会った一瞬に、今までと違う道に、激しくシャンプすることや。人間は、考えるだけからまわりをしてしまって、何の決断もできへんもんやで」

「よくわかっています。でも、やっぱり考えさせてください」

「知恵おくれの子どもの教育は、生きがいがあるもんやで。ぼくはなあ、頭はこんなにハゲて、デブの四十歳のおっちゃんになってしまったしあうたが、心の中には、情熱がいっぱい、君たちよりも若いや。これも、重い知恵おくれの教育や、差別の戦いにぶつかってきたからや。そら、苦しいことも悲しいこともいっぱいあつたで。でも、不思議なことに、むなしいことは、一度もなかつた

んや」

「先生と話していると、若い私たちが老人で、先生の方が若く思えてしかたがありません。うらやましいです」

「そうやつたら、この知恵おくれの子どもたちの教育にぶつかつてみいひんか」

「うして、一、三日たつと、

「やっぱり施設で働くことは無理です。幼稚園か保育園の先生になります」

学生たちの答は、こんな言葉で返ってくることが多い。

「どうしてや」

「そり、施設は、しんどくて大変でしょう。それにくらべると、幼稚園や保育園は、楽です。あのような大変なことは、私にはできません」

こんな時、私は、たまらない孤独と悲しみ、そして、怒りと矛盾を感じるのである。



「子ども生命。誰もおかすことができないほど大切なものの、子どもの生命。誰もおかすことができないほど大切なものの、

度おかされれば、一度と生きがえることができないほど大切なものの、地球よりも重たいほど大切なものの、この大切な重たい生命

を、真剣にかつげばかつぐほど、その重みで、疲れるのは当然である。

それが、重い知恵おくれの子どもの生命であったとしても、障害をもたない子どもの生命であったとしてもかわりはない。

もしも、幼稚園や保育園の方が、障害児教育より楽だと思うなら、それは、その子どもたちの生命を、真剣にかついでいないのではないだろうか。

また、現代は、資本主義機構の中における生産性社会である。

ここでは、目に見える生産性のないものは、無用のものとされ、重い知恵おくれの子どもたちも、生産性がない人間として、捨てられることが多い。

しかし、障害をもたない子どもたちは、生産性がある人間として、国からも社会からも大きな期待をかけられる。必然的に、この子どもたちには、いろいろな規制が生まれ、子どもの目に見えない心や生命を、おかすことが多い。

教師にとっても、上から決められた目的で、子どもたちに、現象面的な効果を求める授業をおしすすめ、本当に教師として、自分のもつている信仰や、理想や、情熱を、子どもとの人格接触の

中でうえつけることは、むずかしくなつてきている。

教育の世界で、教師の心が生きなくなつて、眞の教育が育つのであらうか。

このような現実をみつめた時、幼稚園や保育園の子どもたちの心や生命のことを、真剣に考えれば考えるほど、良心的に行動すればするほど、教師は、疲れ、大変になつていく。

重い知恵おくれの子どもに対しては、生産性がないために、国も社会もあまり期待をもたず、比較的上からの規制も少なく、教師側は、自由な教育をすることができ、自分の内に秘めているものを生かす場所もたくさんある。この意味で、重い知恵おくれの教育の方が楽だといえるのではないだろうか。

本質的な考え方をすれば、現代社会の中における教育は、重い知恵おくれの教育をしている私たちよりも、幼稚園や保育園の教師の方が大変で、生命の重みで、疲れはてざるをえないのではないかと思えてならない。

楽しいものです



排尿便指導がある。

真夜中の二時ころ、急に用事を思いだして、私は学園に行つた。

宿直の保母が、ニコニコ笑い、子どもに声をかけながら、夜尿おこしをしていた。

ふとんの中にもぐりこんでいる子どもを抱きおこし、手をつないで便所につれて行く。

もうオシッコをたれて、グッショリとふとんをぬらしている子どももいる。

保母は、手際よく、ふとんやパジャマをかえていく。

「いらっしゃいなあ。排尿便指導は、この子どもたちの教育の中で、一番大切なもんや。がんばってや」

私は、声をかけた。

「先生、真夜中の夜尿おこしは大変ですけど、でも、楽しいものですね」

保母が、イキイキとした目で、私を見つめ、こう答えた。

この保母の気持ちに、私は、深い同感をもつた。私も夜尿起こしをすることがある。

重い知恵おくれの子どもの教育の中で、大切なものの一つに、

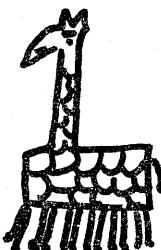
子どもを起こして、便所につれて行く。子どもは、必死になつて私の手にすがりついてくる。こんな時子どもの小さな手と、私は

の大きな手のしつかりした結びつきから、子どもの強い信頼を感じ、温いものが、もえてくることが多い。

信頼が絆なまなづになっている教育ほど楽しいものはない。子どもたちのウンコやオシッコにまみれても、真剣に子どもたちの生命の育いくみをすることは、楽しくて、すばらしいことである。

宿直の保母が、楽しいものですと言つた言葉の中に、私は、教育者としての歩みと、重みをシミジミと感じたのである。

### 効果のないものは無駄です



「真夜中に子どもを起こすのですか。大変ですね。しかし、それだけ教育をすれば、夜尿児が治り、大きな効果があがるでしょ」と、たずねる人も多い。

「いや、一生かかっても、夜尿の治らない子どももたくさんいますよ」

「そんな効果のないことは、やめた方がいいですね。保母さん」と言うと、驚いた顔をして、

たちが大変でしょう」と言われる。

この現代の生産性社会は、どんなことでも効果を求めてものが進んでいく。教育の世界でも、効果を上げるということが、教育のポイントになってくる。そして、効果を上げる授業や勉強が、花ざかりである。

しかし、教育の効果とは何だろうか。

生産性社会の中における効果は、機械的効果である。表面に見えるもの、そして、現象面的に、人間に利益をもたらすものが、重要となってくる。

教育の効果とは、人間の奥深い中に育つ効果であり、目に見えない本質的なものが必要となってくる。

機械的効果と、教育的効果が、同一視される現代の教育は、おそろしいものである。

そして、「効果のないものは、無駄ですね」と捨てられてしまう世界は、子どもの心を殺してしまう。

止揚学園の子どもたちは、精神年齢が、平均推定三ヵ月位の子どもであるため、発達が非常に小さい。

障害をもたない子どもたちは、一日一日と発達していくが、止揚学園の子どもたちは、一年にどれだけ発達したかをみつめなけ

ればいけない。中には、少しも目に見える点では発達しない子もある。

しかし、その子が、リズムの時間、みんなの中に入つて、仲間と手をにぎりあつているだけでも、すばらしい教育の効果が生まれていると、私は考えている。

「重い知恵おくれの子どもたちは、社会復帰ができない」と言われるが、それはまちがいである。たしかに、この子どもたちは、今の日本では就職は不可能である。

就職するということは、社会復帰の一部門であつて、それが社会復帰のすべてではない。たとえ就職ができるなくとも、この子どもたちが、汗を流し、立派な重い知恵おくれの子どもとして生き、歩もうとしている姿を目にした時、この子どもたちは十分に社会復帰をしているのだといえるのである。

この重い知恵おくれの子どもたちが、歩む歴史は、偉大な人間の歴史なのだ。

このような考え方、効果觀が、現代の教育の世界に必要ではないだろうか。

十月十日、止揚学園の運動会が行われた。

この運動会は、能登川町の人達も多数参加して、町の年中行事の一つになっている。

走れない子が、町の人たちにおさされて走っている。その必死な子どもの姿に、何ともいえない美しさを感じる。この子どもたちの目に見えないものの中に、すばらしい賜物や生命が、いきづいていることを感じる瞬である。このいきづきこそ、人間そのものの姿である。

しかし、それが目に見えないと無視される今の社会の中で、重い知恵おくれの子どもたちと共に歩みながら、『生命をかつぐって重いなあ』と、シミジミと感じる今日このごろである。

(止揚学園 カット)



# 旅・発達

(一)



津 守 真

私は、しばしば、自分自身の青年期や、幼少年期に遡って身をおいて、そこから現在を見ているときがある。いろいろの人にきいてみると、多くの人が同じようなことをやっているらしい。こ

とがらによって、青年期に立ちもどることもあるし、また、幼児期の、非常にかすかなおぼろげな記憶の中に、それはもはや単なる記憶とはいえない、現在に通じている感覚を見ていくこともある。ここで実例をあげるべきであるようと思うが、どんな実例をあげても、それは單なる一例にすぎず、それを固定化して考えをすすめることになるとおそろしいので、敢て実例を記さないことにする。それほどに、人によって、いろいろの体験と記憶と、それを掘り起こす多様な現在の状況があるのだと思う。初心にかえりうるものそれの一種で、志を立てたときの素朴な感覚が、実

は、そのことの本質にふれていることを再発見するときに、人はもう一度新たな気持ちで、そのことに立ち向かうことができる。

幼少期や青年期という、人間の成長期は、後になつて、何度もそこに立ちかえつて再出発する場所として、重要な意味をもつてゐる。人間の発達を考えるときに、このことはぬかすことのできない重要な点であると私は思う。

こんなことをいろいろと考えているときに、私は、国際応用心理学会のシンポジウム「伝記および自伝の心理学」に参加することになった。午前九時から午後五時までにわたり、九名の人人が研究報告を行つて討議するという大きなシンポジウムであった。私は、かなり長期にわたる描画の縦断資料のコレクションをもつており、少しばかりそれについての研究報告もあり、このシンポジ

ウムのオーガナイザーであるデール・B・ハリス教授がそのことを知つておられたので、それについて報告するようにとお誘いを受けたのである。こういう表題のシンボジウムで、他の外国の研究者がどういうことを考えているのかわからないままに出かけたのであるが、終了したいま、このシンボジウムの意義も明瞭になり、おもしろいこといろいろあつたので、旅の感想とともに記してみようと思う。

長い間、この「幼児の教育」誌の編集事務をして下さっていた井上（寺井）直子さんの一家が、米国の西海岸のシートルに住んでおられる。その井上さんご一家にヴァンクーヴァ（カナダの西端、米国との国境の都市）まで自動車で送つていただき、そこから飛行機で大陸を横断して、カナダの東部にあるモントリオールに着いたのは、午後十時だった。はじめての外国の都市に、夜遅く到着することに不安を感じていて、もつと早い時間に着く飛行機がないか調べたりしていたが、着いてみると、カナダの夏の夜の十時は、ようやく、太陽で沈んだばかりの時間である。暗くなつたばかりだと、まだ宵の口のような気分だから不思議である。三年前に米国に来たときに、夜、外出することは危険なことを見ていたので、空港からタクシーに乗ると、私は運転手にその

ことをきいてみた。すると、耳もとに小型ラジオをくつつけるようにして野球放送をきいていた運転手は、即座に、モントリオールでは、町を歩いても危険なことはない。カナダの都市は、米国とは違うと、昂然と答えた。事実、夜十二時近くに、ダウンタウンの中央にあるホテルに着いたときには、通りに一ぱいに、多勢の人があちこち、ひきもぎらずに歩いていた。それも、思い切ったファンションの服装をした男女が、夜中でも明るいショウウインンドウをのぞきながら、歩いている。ちょうど、東京の銀座と新宿を合わせたような賑やかさである。これは、私には全く思ひがけないことだった。そのほかにも、思ひがけないことにいくつも出会つた。そのいくつかを拾つてみよう。

米国人は、カナダを米国的一部分のように見る傾向があるが、カナダの人は、米国とは違うことを強調するようである。モントリオールは、英語とフランス語と両方が話され、地下鉄も、商店も、学会の会議も、英、仏両語で注意書や掲示が記されている。フランス語圏の人は、モントリオールのことをモレアンと呼ぶ。この町は、三百年ほど前に、フランス人が移民してつくつた町で、古い町は全くヨーロッパ風の建物と街並みである。新らしい街の中央部も、半分はヨーロッパ風の建物で、重量感のある石の建造物や、窓ごとにバルコニーのついたアパートメントなどに混

つて、近代的な高層建築が林立している。最近は、万博もあり、また、次期オリンピックがあるので、街のいたるところで、新しい建物や道路を作るので、工事の機械の騒音のあることは、東京と似ている。国際学会は、近代的なホテルの二階を借りきって行われたが、プログラムのどこにも、開催場所のホテルの名前が書いてなくて、多勢の人がまごまごしたり、いくつもある特別講演の行われる部屋の記載がなかつたり、登録の窓口が狭くて延々と列をつくって、一時間以上も登録に時間がかかったり、わからないうことがあって尋ねても、担当の係でないと全くわからず、横の連絡が悪く、組織の運営の悪さは、日本では考えられないほどである。よくいえば、のんびりしていて、神経が太い。

このように、外に出てみると、ふだん、日本の中だけにいたのでは、考えたこともなかつた思いがけないことをいくつも経験する。中でも、今回の旅を通して考えさせられたことは、西洋では、自分と他人とは違っていることがあたりまえであるという大前提の上に立つて社会生活ができるのに對して、「本では、自分と他人とは違っていないのがあたりまえという大前提があるのではないか」ということであった。これは私の觀察であるから、他の人は違つたようによるかもしけない。しかし、私の觀察として、敢てもう少し述べてみよう。

モントリオールはファッショングの町であつて、男も女も、好みの服装をして歩く。男性のおしゃれは特に目立ち、ジャケットやズボンも、われわれの目から見ると、奇想天外な色彩や仕立てである。どんな服装をしていても、おかしいということはない。もちろん、日本人が、日本好みの灰色の服に、渋いネクタイをしていても、それがその人の好みならば、もちろん、それで通用する。しかし、もつと違う好みならば、それが平均とどんなに違つていようと、そのようにしてかまいまいはしない。人はそれぞれ違う好みと考えをもつてゐるのだから、それに合うように自分が考えればよいのである。そう考えてみると、日本語には、みつともないとか、見苦しいとか、他人から見てどう思われるかということを見えるかどうかかといふおしゃれが多いのではないか。それに対し、西洋人のおしゃれは、自分がどのくらいすてきに思うかといふことが主たる評価の基準になつてゐるのではないだろうか。もちろん、西洋人でも、自分が特別に着飾つたときには、他人に見てもらいたいと思うし、見せびらかす。また、ある種の会合に行くときには、そこにふさわしい服装であるかどうかを人にたずねることはある。けれども、それは、その会合が、勤め先からすぐ

に集まる会合であるとか、一度、家に帰つて出直す余裕のある会合であるとか、その理由がはつきりしている。日常いつでも、他人の眼が自分の眼よりも優先するということはない。このことは、服装だけのことではない。考え方についてもそうであつて、人が自分自身の考えをもち、他人とは違つてゐることはあたりまえのことである。どんなに違つた考え方をもついていても、それはその人の考え方であつて、違つてゐるからいけないとか、おかしいというようには見ない。

西洋の社会は、違つた考え方、違つた好みをもつ人々が集まつてゐるという大前提の上に成り立つてゐるので、違つた人々の間に共通の点を見つけて、公共のものを作り上げてゆこうとする積極的な努力がなされる。とくに米国のように、歴史の浅い国では、集まつた人々がよいと考えれば、どんなことでも、作ることができる。今まで前例のないことでも、皆がよいと思うならば、実行するのである。米国で、新しい教育方式が早くにとりいれられて普及するのは、こういう考え方方が一般に地盤にあるからといえるであろう。日本とはおよそ違つたこのよくな風土の成立については、最近翻訳されつある、ローラ・インゴールス・ワイルダーの本、「大きな森の小さな家」「プラムクリークのはとりで」、「バルバレイクの岸辺で」「長い冬」「大草原の小さな家」(福音館)

などの中に開拓者の家庭に生まれ育つた一人の少女の眼を通して描かれている。米国の教育が知的教育に傾いても、教室での教育の実際は、画一教育になることなく、ひとりひとりの子どもが尊重されるのは、こういう地盤があるからだと思う。

これに対しても、日本人の考え方の前提には、自分は他人と同じであるという考え方、あるいは、同じ仲間に属するという考え方があるようと思う。服装もそうであるし、考え方もそうである。自分が大多数と違つていることを恥しいと思つたり、他人が大多数と違つていると、いけないことだと思つたりする。このことは教育面にも同様であつて、皆一緒に体操をしたり、整列をしたりすることが重んぜられ、それから外れる子どもは、問題視される。

日本人の考え方には、人間の共通性を見ることのできる精神的地盤がある。以心伝心というよな、ことばを並べなくとも、相手に通じることができることを多くの日本人は知つてゐる。それは、小さな島国の中で、長い年月、共通の風土の中で育つてきたためかもしれない。精神の深層における共通性に目をとめるならば、おそらく、人間には共通な経験があるのでと思う。しかし、それが社会生活の表層において求められる、個を無視することになつてしまふ。公共のものを作り上げるために、まず他人と違う自分、自分とは違う他人が当然のこととして認められねば

ならぬ。このことは、権力をもつ者や、主流といわれるものに依存しなければ生きてゆくことのできない社会においては、非常にむつかしいことである。そこでは人は、自分を、権力や主流の側と同一視することになるか、あるいは、それに反逆する者として自分を見ることになる。自分を他人とは違った存在として見ると、いうことは、これとは全く違った地平に立つことなのである。それには社会に目を向ける前に、社会を超えた絶対者に対して自分をおいて見ることがなければならぬ。これは、日本人の精神文化が、これからかちとらなければならない課題であると思う。そして、互いに違った人間が、公共のものを作り上げる努力が、いろいろなところで、長い間かかるつて、なされなければならないのだと思う。

番苦労しますねということであった。彼らは家に帰つて何をするかといえば、特別に趣味があるわけでもなく、芝生を刈つたり、家の前に椅子を持出して腰かけて、ただぼんやりしてしたり、よその家を訪問したりして過ごすのである。そういえば、モントリオールでも、バルコニーや階段に腰を下して通りを眺めている人の姿は、いつも目に付いた。そして I 氏は、「白人は日本人みたいに、すぐ怒つたり、いらっしゃりしないんです。ゆつたりしてゐるんですね、時間の単位が長いんです」といわれた。日本人の会社員の生活は、会社の仕事が全部である。彼らは、自分の生活が主で、会社の仕事は、その中の一部なのである。私は、I 氏の觀察は、よく当たつていると思った。

シアトルで、日本の商社の駐在員をしておられる I 氏に、私は、白人を従業員として雇つてみて、日本人と違うことを感じられますかとたずねてみた。I 氏は、直ちに、非常に違うと答えられた。白人は、八時から始業というと、八時ぎつかりに来て仕事が与えられるのを待つてゐるが、四時に終業になると、たとえ帳簿のつけかけでも、帳面を閉じて帰り支度をするという。日本の本社からは、もっと能率よく働くといつてくるが、残業してまで働くという観念は彼らにはないし、その間に挟まつて、一

日本人が、日本であたりまえと思つてゐることは、世界の舞台に出してみると、あたりまえではなくなる。日本語で通じ合うことのできるのは、世界中で小さな日本列島の中だけである。そのことを忘れる、また、いつの間にか、世界から孤立しかねない。それでは、日本人が外国に行けばよいのかといえば、そんなことですむ問題ではない。それは社会の相異をこえて、人間に共通な心の真実を育て、それが通用するような社会をつくり上げてゆくことだと思う。簡単にいいすぎたきらいがあるが、それが、われわれの身のまわりの教育の課題でもあり、われわれの社

会の課題である。それがいかに現実にできない者であり、拙劣な者であるかを痛感しながらも、やはり、このことが、教育の重要な課題であると私は思う。

さて、発達についてのシンポジウム「伝記と自伝の心理学」の中で論ぜられたことを少しく紹介しようと思つて書き始めたが、その序論で時間を費してしまつた。しかし、このことは、発達の問題と無関係ではないと私は思つてゐる。人間の発達の問題は、広くいえば、こういう、歴史、文化、社会のことをふくんだことがらであり、西洋の最新の知識を移入するというだけではすまないものを、その問題自身の中にもつてゐるからである。

このシンポジウムのオーガナイザーであるハリス教授は、米国ベンシルヴァニア州立大学の心理学科の主任教授であり、発達心理学を専門とする学者であるが、開会に当たつて、次のような主旨のことを述べられた。

以前には、人間のパーソナリティの研究は、もっぱら哲学者の仕事であり、後には文学者の仕事となつた。ブルターフの「生涯」は実際の人間の記述の最初の試みとして、心理学的研究ともいえるであろう。今日の心理学者にとっては、伝記や自伝はどのよう

な役を果しているであろうか。手紙や、日記、自伝などは、心理学者にとって役に立つであろうか。以前に、ゴルトン・オールポートは、このような資料を心理学的研究の材料として手がけたことがあるが、その後、ごく僅かの心理学者がそれを継続したにすぎず、心理学の関心は、実験や測定の方に移ってしまった。臨床心理学の人々が、人間の主観的な材料を扱わざるを得なかつたが、実証的方法との間に生ずる論議は十分になされないままでいる。今日、心理学における厳密な実証主義は、排斥されるところまではいかないまでも、心理学は主観的側面に対してもうだいに目を向けるようになってきている。発達心理学者は、総断的な資料に関心をもつが、ひとたび個人の発達に目を向けると、個性の独自性に魅せられ、それを科学的に操作することができる大へん困難であるにもかかわらず、それは心理学の方法論を考える上にも、また人間の行動の科学的研究を、人間のものとして行うのにも、重要なものと考えようになってきている。今回、このような伝記及び自伝の研究のシンポジウムを企画することができるかどうか、その可能性を検討したとき、直ちに、同じ方向の関心をもつ心理学者の名前が次々にあがり、遂に、このような大シンポジウムの計画にまで発展したのである。大たい、以上のようないきもの、冒頭演説があつて、各研究者の報告に入った。

橋詰良一著

## 「家なき幼稚園の主張」と実際より（八）

### 第十一 保育の内容（つづき）

#### 英語は幼児の時から

英語を外国婦人たちに教えてもらいたいと考えた私の願いは、言語の著しい発達期である幼児の時から外國婦人に接しさせて、自然のうちにその言葉に馴れさせ日本の言語を覚えていくと同じように、外国の言語をも呑み込ませ置いてやることは、後年の生活時におけるいろいろの悩みから救つてやる唯一の方法だと考えますからです。

東京の子どもが池田へ来て私の幼稚園に通い始めると、三日たたぬうちに池田言葉になってしまいます。それと同時に、他の幼児たちもいくらかは早くも東京の言葉になつて行きます。東京から来た親たちのそれを恐れることは、悪疾が感染するよりも甚しいよう見えますが、そのように鋭敏な言語の発達、聞いて覚える言語が直ぐに舌を通じて話し出されるまでの発達を熟知してい

る親たちは、この時期を利用して外國語の基礎を据え付けてやるだけの親切をなぜ持つてやらないのかを私は長らく疑つてまいりました。

成人の後、というまででなくとも、中等学校時代になつてから急に記号としての英語を覚えさせられた者にはおのずからの言語となつて、聞けばわかり、わかれば話せるというまでに自分のものにすることはできないのですが、日本語を覚える通りに英語を覚えたなら、何の苦もなしに日本語即英語の三昧に入ることができる。ほんとに微塵の苦もなしに英語を話す人になれる。

それは一たび小学期を英語なしに通過しても、幼児期における言語の基礎は其の言語に触れるときに再燃して来る。

幼児に覚えた郷土の言葉が、後年其の郷土人に会ったとき卒然として再燃し正に郷土人たるの資格を以て話し得る事実は何人も経験しているところだと思いますが、私は、外國語なしに世界的な知識の門戸をたたき得るまでの自由を持たない日本人には、中

学女学の授業難はなくとも、かくして幼稚期から外語培養をするのが、何より大きな教いであると確信しています。

で、近くに住んでおられたアレキサンダー女史（長くウイリミ

岸、身体検査等

ナ女学校長を勤められた米国婦人）を頼んで、毎週遊びに来ていただいて、幼児たちに話を聞かせていただいたのですが、意外に早く、聞くことから理解していました。

園から英語に親しんで居た幼児が、正科に英語のあるような小学校を通過して、現在男女学校で英語の模範的成績を得ている実例はいくらもあります。

#### 各園の年中行事

各園の環境をなしている大自然が、いつとはなしに各園の年中行事をつくって子どもたちや先生たちを喜ばせています。

それを表にして置きますから、鳥かん図にあわせて見てほしいと思います。

#### 表 各園に出来た年中行事の主なるもの、から

1月……お正月の会、新年挙賀式、お鏡餅開き、冬ごもり、たこ上げ、カルタ、羽根つき、母子会等

2月……節分の会、雪なげ、だるまつくり、紀元節、つくし取り等

3月……おひなまつり、卒業式、卒業記念子ども園遊会、卒業

記念旅行、梅見等、四月入園式、よもぎつみ、れんげつみ、夜ざくら会、お花祭、天長節、わらび狩、お花つみ、彼岸、身体検査等

五月……春季遠足、端午の節句、草つみ、よもぎ餅つき、雑魚取り、水遊び、いちごつみ等

六月……しじみとり、松林にてお話、水遊び、植物園菖蒲等

七月……七夕まつり、夏祭、水泳、お川遊び、噴水、夏祭等

八月……暑中休み、水泳、貝拾い、魚すくい、童謡盆踊り等

九月……夏休み、お月見、秋の虫、コスマスつみ等

十月……アンダーセンまつり、お月見、きのこととり、松露とり、菊見、栗拾い秋季遠足、動物園見物等

十一月……明治節、新嘗祭、木の実拾い、ぶどうがり等

十二月……餅花作り、お正月の支度、クリスマス、冬休み等

#### 第十二 屋外温度の調査

私はこのように野の幼稚園をつくって屋外を常の家とするような子どもの生活の営みを計画した最初から、せめては僅かながらも何かの参考となる材料を自然のうちに集めていきたいと願つて来ました。

## 室内温度と室外温度

一番最初に私が研究の必要をみとめたことは室内温度室外温度とがどれ位ちがうものであるかということを人々にも見せ、自分も見たいということでした。

で、池田に集合所ができるとすぐ室内と室外(南うけの軒の下)

とに寒暖計をとりつけておいて、毎日の日記へ午前九時と午後一時とに温度を記入しておくようにしてきました。それは池田以外の各幼稚園にも同様に実行を続けてきたのですが、今日集まつたものを静かに見ていきますと、實に喜ぶべき資料を得たものだと思われます。

この資料によりますと冬の平均温度をみても夏の平均温度をみても、午前でも午後でも、室内でも、室外でも想像したほどの、温度の差のないことが知れます。

夏の朝の室内室外の差はわずかに摂氏〇・八度、午後は一・九度、冬は南うけの外部とストーブをたいてある内部の温度の差が、朝でも、午後でも、五度か六度の差よりないのをみますと、室内から室外の保育にうつって行くことは決して困難を感じないものであることがわかります。

その他、一日一日の温度について、内外を比較しても、やはり大差のないことを見ると非常に心丈夫な資料を父兄たちに見

せることができます。

このような証左を父兄たちに見せましてからは、しだいに室外を恐れる大人の気持ちが緩和されていったようと思われます。

冬は室外が温い

一般に、冬季はどうしても室内よりも室外が寒いものだとは誰でも信じきっていたものであります。南をうけて強い北風をよけることのできる場合は概して、室内よりも室外の方が暖かいことをこの表が示して居ます。もつとも、朝のうちにはストーブの意味が薄いために、日光のある室外が暖かく、午後はストーブが十分に熱するためいくらか室内が暖かになっていくことは明瞭であります。が、それでも内気と外気とが、かくまでの近い温度におかれていることを、私たちも気づかなかつたのであります。

その他、一日、一日の内外温度を比較してみても、両者の間にはほど大きな温度の差違なきを知ることができましょう。

(次に箕面の家なき幼稚園の一年間を通じた月別、室内外の温度表が掲載されていますが、はぶかせていただきます。大変細かい調査で、頭がさがります。

### 第十三 野外遊戯の自然研究

若い女性たちが、幼児と共に大自然の中を悠遊して、かわいい子どもたちを満足させるための工夫や、幼児たちをよくはぐくむための作業として知らず知らずのうちに発見した自然物の取扱い方は、今までの教育界に見ることのできなかつた「自然恩物法」ともいうことができましょ。

今、三十幾人の先生たちから得た報告を土台として、書きながら見てみると、實に左のようなたくさん種類にのぼつております。

#### □生物を対象とするもの

かえるつり、イナゴとり、バッタとり、せみとり、しじみとり、かたつむりとり、かにとり、ざことり、えびとり、どじょうすくい、小さい竿で魚釣り、きりぎりすとり。

#### □草木を対象とするもの

つくしつみ、松露とり、きのことり、笛のシンで草りをこしらえる。松葉で旗刀を作る。笛舟作り、れんげの首輪作り、麦笛作り、どんぐりごま、からすの豆で笛を、たんぽぼの茎で笛を、笛の新芽で亀を、桜の花びら通し、クローバーの茎でちょうを作る。菊の実と杉葉でかんざし作り、つばきの葉の草り作

り、桐の実のからを二つ松葉でつないで舟を、いちょうの実で人形の顔、もくれんの花びらのお皿、どんぐりのはかまでまごとの茶わん、わらびのだけたもので刀鉄砲を、ボプラの葉でかしわ餅、つばなの先でおひげや髪の毛、いちょうで扇作り、松葉すもう、わらびとり、植木作り、松葉ではさみと弓を作り。芦の葉で粘土のちまき、まるいボプラのようなる葉で粘土のかしわ餅、れんげ・すみれ・たんぽぽなどいろいろの草花で花やさんごっこ、おしゃるい花を集めて店やごっこ、ボプラで引き合い、花や草の汁で絵具やごっこ、すすきの長くなつたので刀作り、木の葉をままごとに、れんげの花におおばこの葉を着せて人形作り、すすきの先を結んでちょううちん作り

#### □金石粘土を対象とするもの

粘土細工、石ころを集めてかんてき、泥で左官やさんごっこ、土でおまんじゅうやさんごっこ、河原の石つみ、瓦くずを拾つて積み上げる遊び

#### □木竹を対象とするもの

木切れで汽車を作る

次に先生たちの報告の一節を書きましょ。（一部のみ）

◇松の皮からいろいろなものの形を作り出しました。これは思い

出深いものです。私は幼年時代を古い城下町で過ごしましたが私の幼稚園も小学校もそのお城のおぼりばた近くでしたからお城へはよく上りました。そのお城の古い松の木の幹の皮を……いつまではがしてもかぎりがなかつたものでしたが、ちょうどあの子ども博への出品が動機になつて子どもをお山へ連れて行つた時でした。

私たちには思いも及ばないものの形を子どもたちは、はがした松の皮から見いだしました。その時は本当にうれしいと思いました。「ああ、人が走つてはる……」といって一生懸命にそうつとはがしたり「おさるがいるわおさるが……」といふように。

◇春がたけたころはタンボボです。タンボボの首と首とで落とし合いが盛です。それは茎をもんでも柔らかくしたり、二、三日も前からお家へ持つて帰つて塩づけにしてまで。塩づけのは強くて、つけてないのでなかなか負けません。中でも

1 はげちやびん（といつていきました。むく毛のとんでなくなつたもの）が一等強く

2 おじいさん（むく毛のまだあるもの）

3 おじいさんになるまでの花のしぶんだもの

4 咲いている花

い花をつけているのを見つけたらとんで行ってつみ取つてしましました。白タンボボのはげちやびんときたら一等いいものですから、先を争つてつみに行きます。（子どもは散つたあとでも基の色でよく知っています）大きい子どもたちはそのいいのを早くつみますが、小さい人たちは黄色に咲いている花でもたんと取る方がいいといつて、多いのを喜んでおりましたけれど。

◇つばなの葉が紅くなつた晩秋から初冬にかけてのころ、あの広い芝原で遊んでいる時、その紅く染まつた葉を子どもの手首にまで結んでそれをうで時計ということにしました。みんながそれは喜んでそのころはあそこに行くたびに結んでいました。両方の手首にまで。一等初めに、とらちゃんと結んで上げたようにな見えます。何でもないようですがれど子どもにとつては……その時うれしく思いました。

◇野生大根の先に細いボンヤボンヤとしたものがついています。それを引き抜いてあごの下につけ、ぼくはおじいさんだと喜ぶ。（幼児の案）

□野するお遊び

かくれんぼ、鬼っこ、めんない千鳥、あるせんとまとめて、中の中の小ぼんさん、汽車っこ、ままこと、戦争っこ、剣劇、たこ上げ、羽根つき、すわり鬼ごと、子とる、つみ草、靴の順でした。中でも白タンボボはこと更強いものでしたから、白

かくし、いなひき、手ぬぐい落とし、帽子とり、じやんけん遊び、石けり、大日本字書き、魚釣り、さこトスカン取り、走り競争、すわり当番、まり送り、スプリンレース、リレー、丸とび、

すもう、うずまき鬼ごと、ここはどこ細道じや、砂山のすべりじっこ、トンネルじっこ、兵隊遊び、ズイズイズッコロボン、乳母車で電車じっこ、お砂で粉やごっこ、草の上でお話しっこ、猫とねずみ、歌劇じっこ、日傘で遊戯、目かくし鬼ごっこ、技能のボート流し

以上の種目をすこし眺めて行きますと、ほんとにやさしい子どもたちには崇高な大自然の作為に触れて喜々として神の招きに近よりつつあるようすがまさまさとして思い浮かべられます。

もし、今後の自然保育者が、幼児を自然に導びこうとする手引きとして、参考されるなら、最適當であると思います。

おもしろいことはこの考察が、大抵は幼児自身の生活から娘たちが、養い覚えたものかまたは発見したものであって、かの大人的な、功利的な考えから出発したような、苦心のあとをとどめないことがあります。

(つづく)

幼児の教育 第七十四卷 第二号

二月号 ◎ 定価一〇〇円

昭和五十年一月二十五日印刷

昭和五十年二月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

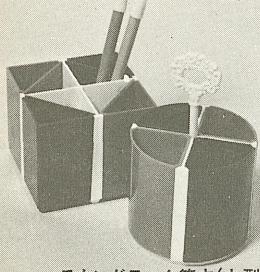
印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一  
発売所 株式会社 フレーベル館  
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

# 卒入園記念品に最適です！

スクウェアラック筆立(角型)



ラウンドラック筆立(丸型)

お子さまに与えるものは、どんな子さなものにも大きな教育的配慮がなされていなくてはなりません。フレーベル館のプレゼント用品は、安心してご使用いただけます。

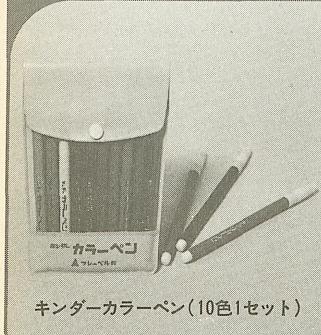
キンダーカラーペアペン  
(12色1セット)



自分で作る絵本

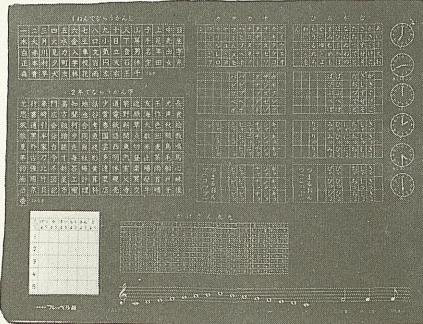


ふで入れ(桃・青)



キンダーカラーペン(10色1セット)

スタディーシート



証書用ビニール筒(桃・青)

フレーベル館



キンダーブック ①一情操  
4月号 “ひらひらりほん”



キンダーブック ②一観察  
4月号 “ぎゅうにゅう”



しぜん 4月号 “てんとうむし”



キンダーおはなしえほん  
4月号 “きんのいととにかく”

## 4月号 月刊5誌



ホームキンダー  
4月号特集  
おやじママからのアドバイス50

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**